

11月



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
11月号
No. 605

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





出合い花 (2)

〈表紙の花〉 仙溪

先月号で2本だけでいける「出合い花」をいけてみよう!と書いたが、是非みなさんもいけてみてもらいたい。

あまり考えすぎず、直感をたよりにして手にした花をいけてみる。

花材にもよるが、普段の稽古用の器ではなくて、いつもはそのまま棚に飾っているような小ぶりの器に、小さめにいけてみてほしい。はじめから小さくいけるのは勇気がいるけれど、小さくしてこそ生かせることもある。

黄金色の薄の穂に、鉢植から切った秋明菊を添えて、小さな口の丸い器にいけた。この器の胸はえくぼのようにへこんでいる。

お月様へのお供えのイメージ。

花材 薄の穂 (稲科)

秋明菊 (金鳳花科)

花器 陶扁壺

喜樹 〆2頁の花〆 櫻子

数十年ぶり蔵や花器置場を整理して久しく使っていない花器が沢山出て来た。9月号のテキストから順番に花をいけている。

この三彩の壺は祖父も母も好んで使っていた記憶があるが、いけにくいのか、いつも奥に仕舞われてしまっただけで出てこない。剣山も入らないくらい口が小さいのに水盤のように浅く平たい。大きな枝のかんれんぼくをいけるのは難しかった。



た。しかしいけ終えてみると、二種の枝ものと大輪の薔薇に負けない強い壺だなと感じる。口が小さくても少しだけ花をいけて満足する性分ではないので困るところだが。

中国原産のカンレンボクは秋になるとミニバナナをつけたような球形の集合果となる。

果実、根、茎葉に抗癌効果があり、薬用とされてきた。それで英名はcancer treeとかhappy treeというのだ。中国では実の形から子孫繁栄を表す喜びの木ということで喜樹と呼ばれている。意味は違っても希望を与えてくれる木であつたのだと思う。

花材 早蓮木（沼水木科）

丸葉の木（満作科）

薔薇（薔薇科）

花器 陶扁平壺

トゲのない薔薇

△3頁の花▽ 桜子

今年の鈴薔薇の実には野薔薇の実よりも早く出回ったので、花会やお稽古に何度もしけさせてもらえた。野生の薔薇の実なのに年々棘が減って、扱いやすくなっているのは有り難い事。

木苺は同じバラ科の植物。鈴薔薇の葉は取られているので必ず艶やかな緑を添えたい。ネリネの花も茎も瑞々しさを与えてくれる。

花材 鈴薔薇の実（薔薇科）

木苺（薔薇科）

ネリネ（彼岸花科）

花器 あげび籠



アブラドウダンの立花

仙溪

この立花の真と請に使った枝は、ここ数年、アブラドウダンの名前で出回るようになったもので、葉の表面に微かな光沢があり、互生する葉は枝先に集まるので輪生しているように見える。細い枝であるが、水揚げがよく、色づいた葉は二週間たった今も元気である。

夏頃の稽古でいけた時には花が咲いていたが、ドウダンツツジの花には似ていない。

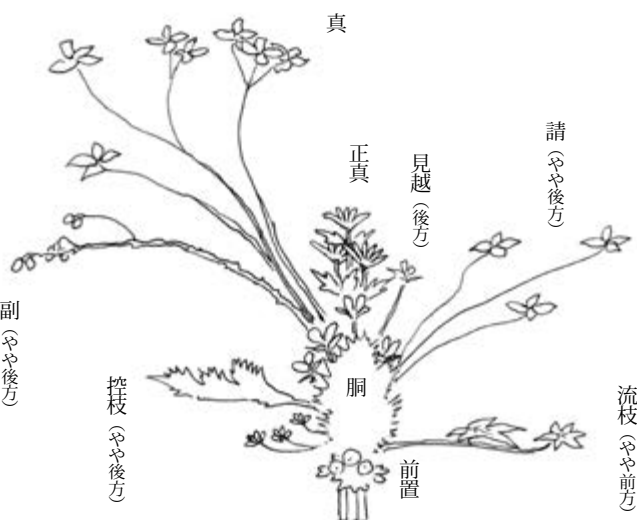


バイカツツジの花
参考 (<http://blog.livedoor.jp/tada170302/archives/5701634.html>)

調べてみると、これはバイカツツジであるらしい。バイカツツジがアブラドウダンの名前で流通しているようである。

バイカツツジは躑躅科・躑躅属の落葉低木で（ドウダンツツジは灯台躑躅属）、山地の林縁に生育する。水揚げがよく、葉に油を塗ったような照りがあるので、花材となったのだろう。きつとこれから花材として定着すると思う。

細枝は慎重に扱わないと折れてしまうので注意したい。



流祖の時代より

近松門左衛門

「聖徳太子繪傳記」

近松門左衛門は、江戸時代に上方（京都・大阪）で活躍した人形浄瑠璃の作者である。承応二年（一六五三年）から享保九年（一七二四年）までの七十二年の生涯で、百作以上の浄瑠璃を執筆し、歌舞伎にも作品を残している。

浄瑠璃の一つに「聖徳太子繪傳記」というのがあり、その中に立花が出

流枝(やや前方)

請(やや後方)

見越(後方)

正真

真

前置

胴

控枝(やや後方)

副(やや後方)

てくる。話のあらすじは次のようなものだ。

用明天皇の皇子として生まれた聖徳太子は仏法に帰依し、排斥派の物部守屋の母が仏法をのしつた時

不思議を見せ、改心させる。母は自害して守屋を仏法に入るように勧めるが、守屋は拒絶して反逆し、太子方と争う。帝や北の方を奪い幽閉などした守屋を、太子は河内国稲村城に攻めて、これを滅ぼす。(以上、

廣田隼夫氏のHP「近松門左衛門でござーい」より転載)

さて、立花のくだりは、物部守屋の母が、息子の守屋に自分の仏法への改心を受け入れさせる方法として、聖徳太子から「毎月六齋日、草木の花を瓶に活け、諸天に祭り供養せよ、凡そ立花の功德には、草木成仏の因縁花散り葉落るにも聲聞無常の悟あり、粧ひ立て色々に咲き匂ふ花を見る時は、濁る心も清やかに怒りなく恨みなく天人の歓楽花にあり、いかに放逸の守屋も花には心やはらぐべし、その時出家の姿を見せ、仏道に誘引せよ」と教えられ、はたして守屋は立花の会のようなものを催すこととなるのだが……。

そこでの立花の描写を抜き出して、ここに書き写してみる。

あしの心、柳の副、前置に寒菊正眞の鶏頭に少し色を持たせてしやれ、木の取合せ、

南天の心、正眞のしをん、りんどうのあしらひ、胴にいぶきのうつりのよき、

松の心、正眞の燕子花、枇杷の葉をつかふたり、控の柏梅戻の受見越の檜葉

青葉まじりの紅葉の心、なかし控の取合、正眞の菊、どれもこれもよう出来たとほめ囃す、

そして「眞の立花」と題して次のような描写をしている。

是々御覽ぜ、是で此神に手向の眞の花の数、ゆがまず直なる心の

非常も心あり顔に、さしかこひたる立花の作意、天も納受人衆みようえん風流のもてあそび、月花わかぬもの迄も、あつと感じて詠めけり、

なんと素晴らしい描写だろう。少し意味のわかりかねるところもあるが、立花に対して造詣が深くないと描けない文章である。聖徳太子の時代はまだ立花は生まれていないはずなので、近松の創作として歴史の中に立花を道具として組み込んだものと思われるが、それにしてもこの詳しさはどうだろう。

流祖、富春軒仙溪の「立花時勢粧」が世に出た貞享五年（一六八八年）には、近松三十五歳。同じ京都の地で仙溪も近松も過ごしていたことになる。

その頃、立花の会が競うように催されて、その評判を反映して近松は立花を話に組み込んだのだと思う。「立花時勢粧」もおそらく参考にしたのではないだろうか。

人形浄瑠璃の演目に立花について見事な言い回しがあれば、観客も立花にさらに興味を持ったに違いない。立花の功德を聖徳太子に語らせているところにも注目したい。

参考





ビッグイシュー日本版

「生き残りのしくみ」⑥

1951年、千葉県にある落合遺跡（縄文時代の船だまりと推測される）からハスの花托が出土し、植物学者の大賀一郎博士によってハスのタネの発掘調査が行われ、地下6mの泥炭層からハスのタネ3個が見つかった。

二千年前の弥生時代のハスのタネは、その年発芽して、翌年には美しい桃色の花を咲かせた。

植物の生命力の強さに脱帽である。

先月につづいて『ビッグイシュー日本版21号』より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。最終回。

命を次代につなぐ多様な工夫

二千年の眠りから目覚めた「大賀ハス」のほかに、ツタンカーメンの墓から発掘されたと言われる「エンドウマメ」。弥生時代の遺跡で見つかったとされる「古代コブシ」。室町時代の遺跡から見つかった「ツバキ」や「シラカシ」などが息を吹き返している。植物の人生計画は無限のようにも思える。

「タネは発芽にもものすごく用心深いんです。発芽には、温度・水・酸素の3条件が揃わないとダメだけれど、それに加えて70パーセント以上

のタネの発芽には光も必要。太陽の光の中でも光合成しやすい赤色の光が当たるのを、ちゃんと感じてから発芽します。タネは慎重に、すごい能力を背負いながら命をつないできたんです。」

タネ以外にも植物は工夫をしている。「交配するために虫に来てもらうには、密や香りをつくるコストがかかります。いざというときにも子孫を残せるよう、保険をかけるように進化したのが『自家受精』でできる植物です。例えばスミレには花が開かない蕾があつて、中ではいつのまにかタネがいつぱいできています。私たちが食べているお米や麦、大豆もそうした自家受精の性質を利用して品種改良したから、もみやえんができてと空っぽということがないんです。」

ほかにも熱帯地方のマザー・リーフは、葉っぱの縁にあるギザギザから根や芽を生やし、『ハカラム』とも呼ばれています。」

植物にとつて一番安心な生き方とも言えるのが、地下茎をもつこと。ヒルガオ、ワラビ、タケノコなどだ。「土の中に潜っていたら温度もそんなに変動しないし、地上で芽を出してうまいこと育つことができればそれでいい。」

「最近ツクシが少なくなってきた。ビルや道路の建設で土を掘り起こしてしまうからです。土ごと掘り起こされてしまったら、地下茎を生やしていても生きていきません。」

植物は約4億年前から陸上にいて、人間が現れたのはたかだか何十〇百万年前。それなのに地球を自分たちの土地みたいにしていないか。私たちはここで箸を置き、目の前のニンジンやキャベツにも感謝の気持ちをつたえるべきかもしれない。

「植物は、水と二酸化炭素と太陽の光で、自分たちの食べ物をちゃんとつくって、本当にきれいな生き方をしてる。動物は食べ物や配偶者を探してうろろ動き回るけれど、もし植物が動いて、本気で逃げ回ったら、。私たち動物はいきていけないだろうねえ。」

おわり



レモンちゃんは手足の先が白い。畳の上を歩いていても、白足袋たびをはいているみたいで、上品に見える。花をいけていると、ときどき手元を覗きに來る。「レモンちゃんに指導してもらってるように見える」と櫻子がいう。たしかに庭の草木には造詣が深いかもしれないね。



檜扇 寒菊

仙溪

万葉集に「ぬばたま」の名前で詠まれている檜扇の実は、夏の終わりに緑色の莢がふくらみ、秋には茶色くなって割れると中から漆黒の種子が顔を出す。

今年はずらしく葉株ごと売られていたので、寒菊をとり合わせて、生花でいけてみた。



数日後に寒菊をはずして、胴の檜扇を留に使い、副の檜扇は花茎を繞めて副流しの動きのある花型にいかえてみた。

少し大きい感じはするが、これから先、葉株で檜扇の実をいける機会が増えてほしいものである。





浜辺 葡萄

櫻子

写真の団扇のような丸い葉はシーグレイプ。アメリカのフロリダ州南部から西インド諸島、南アメリカに分布する常緑小高木。海岸や砂丘に生えるので、和名をハマベドウという。芳香のある小さな白い花を咲かせ、葡萄に似た果実は濃赤色に熟し食用になるそうだ。

昔からこの葉はよくいけられてきた。祖父も両親もシーグレイプがある。と目の色が変わっていた。

特に紅葉が綺麗で大きな木のままで鮮やかな色の花と取り合わせてきたのを覚えている。珍しくて固い丸葉だが、向きを工夫すれば花器と花との接点を上手く繋げて強くまとまる。

いけばなは何でもよいから足元を緑で隠してという発想にならないようにしたいと思う。安易に花器の口元に突っ込まれた葉を見てそう思う。とても大切な場所なのにと。

アンズリウムもピンクッションもありきたりな花で、すでに珍しいものではない。でも取り合わせや器や敷板でとても良い花となる。私にとつては良いか悪いかどちらかしかない花なので、よほど良い花に出会った時しか取り合わせしない。そんな想いもあって良いかな。

花材 アンズリウム（里芋科）

ピンクッション（ヤマモガシ科）

シーグレイプ（蓼科）

花器 金属花器



独楽こまのような器 仙溪

花器棚の奥から、巨大な独楽がくるくると回転しているような器がでてきた。棚からばた餅ではなく、瓢箪から駒でもなく、棚の奥から独楽である。いや、独楽のような器だ。持とうとすると、腰が抜けそうに重い。底は小さいけれど、水をいっぱいに入れると、かなり安定のいい器である。

ちようどこの器がでてきた時に、花屋でアダンの実を見つけた。アダンの実はめったに花屋で売られていない。たまたま売られていたので、独楽のような器にいかしてみた。

アダンの実も腕が折れそうなくらい重たい。腰が抜けそうな器だから、腕が折れそうなアダンの実も、すんなりとおさまってくれた。こんなに底が小さいのにだ。器と花の相性とはなかなか面白い。

黒に近いほど濃い緑色のアンスリウムの葉と、華やいだ色彩の赤紫色のバンダで、南国のとり合わせにした。

アダン（阿壇）は蛸の木科の常緑小高木で、亜熱帯から熱帯の海岸近くに群生する。葉にはすどい棘がある。

花材 アダン（蛸の木科）

バンダ（蘭科）

アンスリウムの葉

花器 陶扁壺



落ちない実

櫻子

秋になると色んな実をいけるが、赤い実で特に好きなものは、梅もどきや七竈、ガマズミだ。

日本には十五種類ほどのガマズミがある（ガマズミ、ミヤマガマズミ、コバノガマズミなど）。葉は丸葉で実より遅く紅葉するものもある。

梅もどきのように小葉を全部取り去ってから出荷される実も多いが、ガマズミは虫食い葉も残っていて、それが素朴で可愛らしく実の赤さを一層引き立ててくれる。

山では二メートル位の低い木なので日頃は目立たないが、実の季節には見つける事が出来る。

ガマズミで果実酒を作ると赤いお酒になるらしい。昔から天然の着色料としても使われてきたくらい、赤い実の色は鮮やかで透明感がある。

ガマズミの語源は嘯み酢実とか神ツ実（神の実）が転化したものと言われる。古くから日本の山に育っていて、寒くなると甘みを増す甘酸っぱい実で豊かな山の幸であったのだろう。

いけていても、実は落ちないし、甘くなるまではしっかりと実のつていてくれた。そんな力強い実りに上品な糸菊を添えた。

花材 英迷の実（忍冬科）
すいかずら

糸菊（菊科）

花器 濃紫色陶花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
11 月号
No.617

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





山野草の紅葉こうよう

△表紙の花▽ 櫻子

山芍薬の葉はバラバラで間が空いていけなくとも思っていたが、見事に茂ってしかも色づいている。2本花瓶にいただけでも充分迫力がある。長くは持たないが、一時でも山の命を感じることができる幸せ。山採りか栽培か、いずれにしても採る人や育てる人に感謝の気持ちをもって、大切に花をいけたい。

特別な花材には、いい器を。蔵の奥から大きな花器を出してきて、山芍薬をいけるとびたりとおさまった。鍾馗水仙（リコリス）と紅葉した薄の葉は、季節の色と空間のひろがりに。

花材 山芍薬の実と葉（牡丹科）

薄（稲科）

鍾馗水仙（彼岸花科）

花器 掛分花瓶（清水保孝作）

赤い実のなる木

△2頁の花▽ 仙溪

秋から冬にかけて、赤い実をいけることが多い。稽古にもよく使うものに野茨や鈴薔薇、藪山査子がある。少し高価なものでは七竈、飯桐、山帰来、ジバーナム。お正月の南天や千両、万年青も赤い実ができる。そしてさらに高価な赤い実の花材として梅擬がある。

日本の本州、四国、九州に分布す



る落葉低木で、葉と花が梅に似ていることからこの名前がある。

葉が自然に落ちる前に切ることで、出荷前に葉をすべて落とすのが大変らしい。実の大きい「大納言」も見事だが、父は作例のような小粒の実がまばらに付いた野趣のある枝のほうが風情があつて好きと云つていた。季節の菊を合わせると凛とした空気がただよ。

花材 梅擬（繻の木科）

糸菊（菊科）

ピンボン菊（菊科）

花器 碧釉花瓶

西洋陶器にいける

△3頁の花▽ 櫻子

糊空木^{のりうつぎ}の園芸種「水無月^{みなづき}」は、白い装飾花が無数に集まって大きな花序をつくっている。どこか外国の香りのする花なので、花器にはデルフトを選んだ。デルフト陶器はオランダの焼き物。「花ふたり旅」ではこの器に母が二種類の向日葵をいけている。絵付けに赤色が入っているためか、秋色の花が似合う。私も母と同じ色合いを合わせている。

水無月の優しい秋色はあえて後ろに配置し、木苺の濃い秋色を前に重ねて全体を引き締めた。明るい黄色の薔薇で、色調にメリハリをつけた。

花材 糊空木^{のりうつぎ}（紫陽花科）

薔薇（薔薇科）

木苺（薔薇科）

花器 デルフト陶花瓶



蔓梅擬の立花

△4頁の花▽ 仙溪

花材 蔓梅擬 油灯台躑躅 鶏頭

糸菊 竜胆 伊吹 苔木

花器 大谷焼花器

今月号は掲載できなかったが、「立花時勢粧」の内容を通して、立花により興味を持たれた方も多いと思う。立花には九つの役枝があり、それぞれが互いに影響しあって一瓶の立花が成り立っている。非常に複雑ないけばなだが、全体の風情というもの大切にしたい。形になればなんでもいいわけではない。





姫柢木 △5頁の花▽ 仙溪

花型 草型 留流し

花器 竹筒

柢木は錦木科の常緑低木あるいは小高木で、生垣などに利用される。作例の姫柢木や、大きな葉で斑入りの鱗甲柢木が生花の花材になる。

ちなみに、蔓梅擬も同じ錦木科である。

姫柢木は枝にねばりがあるので、生花の稽古にはもってこいである。草型、留流しにしたが、留の枝の切り口を工夫しないと、枝先が前へ来てしまうので注意のこと。



■ 冒頭発言

和食・京と広島 世界が認めた自然の恵み (詳報)

広島・京都文化フォーラム2014



祝いや弔事の場に不可欠 荒木さん

京都の伏見で、魚三樓という料亭を営んでいます。1764年に初代が四国の讃岐(香川県)から出てきました。江戸時代、伏見と京都は違う町でした。江戸、大坂、京の三都に次ぐ都市の一つで、伏見港という港がありました。伏見は幕府の直轄地です。参勤交代で西国の大名は、三十三船に乗り大坂湾から一日がかりで川を上って来た。そこに藩邸があり、休んでいくんですね。そういう歴史の中で私も、できるだけ瀬戸内海の魚を使った料理を提供しようという目指しています。

タイという魚は、日本中で珍重されますし、おいしい魚です。昔は、タイのことを魚(うお)と呼んでいました。高級魚を表すのが、魚三樓の「魚」です。

京都の料理とはどんなものでしょう。宮中料理である有職料理、武家の本膳料理、京都には数多いお寺の精進料理、そしてお茶の懐石料理。それらが全て合体して、町衆に食べやすくなったのが今の京料理といわれています。有職料理といっても、食べていると、



普段のご飯作りを大切に 桑原さん

私は、京都の真ん中、中区に住んでいます。まだまだ京都には、街中の町家がたふさふあります。江戸時代から続く、いけばなの家系生まれ、夫が15世家元を務めています。

玄關を入ったところに細い路地があり、長さは30メートルあります。路地を入ってすぐのところに、最初は緊張して来られるのですが、水打つてあり、季節の花を飾ってあるので、ほっとされるようです。そんな思いをしてもうえたので、家をの至る所に花があり、稲古に残った花は、玄關や高草の上に飾り、もちろん床の間にもあります。中庭は川砂を敷き、季節の木、花を植えています。

うちの流派を始めた桑原富春軒仙溪は、立花の至手でした。自然をうまく取り入れた花を立てた人です。立花はいけばなの元の姿。お寺の本堂や仏壇の供花など、これに近い形を覚えてきたかと思ひます。立花は江戸時代中期になると、もう少し生けやすい生花という形になりました。似合つて思っています。

私は、京都の真ん中、中区に住んでいます。まだまだ京都には、街中の町家がたふさふあります。江戸時代から続く、いけばなの家系生まれ、夫が15世家元を務めています。

玄關を入ったところに細い路地があり、長さは30メートルあります。路地を入ってすぐのところに、最初は緊張して来られるのですが、水打つてあり、季節の花を飾ってあるので、ほっとされるようです。そんな思いをしてもうえたので、家をの至る所に花があり、稲古に残った花は、玄關や高草の上に飾り、もちろん床の間にもあります。中庭は川砂を敷き、季節の木、花を植えています。

うちの流派を始めた桑原富春軒仙溪は、立花の至手でした。自然をうまく取り入れた花を立てた人です。立花はいけばなの元の姿。お寺の本堂や仏壇の供花など、これに近い形を覚えてきたかと思ひます。立花は江戸時代中期になると、もう少し生けやすい生花という形になりました。似合つて思っています。



広島湾北側は「箱庭の海」 川上さん

広島湾の魚介類で一番に挙げられるのがカキ。養殖の始まりは、江戸時代の初期、広島に移封された浅野長晟が船(和歌山県)から持ち込んだとされる。石に種を付けて沖にまいて大きく育てたのが、家で作るのと同じく探れなかった。それが、浅瀬に置いた竹や細い枝に幼生を付着させて育てる「ひびき」が導かれて発展した。

私が長年暮らしてきた広島市東部の丹那地域では、1780年ごろにひびきができたようです。南風を受ける広島湾は地域ごとに建て方が違います。

今の若い人には想像できないですが、私が子どものころは丹那沖にも広々とした潟があり、すこしの数の生き物がすんでいた。波止場を抜けて一歩外へ出ると、もうシャク(アナジャコ)の穴がある。20匹、30匹と釣って、天ぷらにしよう。そのうちこの海の若い人は離れて、海のものに見向きもせんやうなうた。そういう人に食べさせてあげたら、すぐ海に戻ってくる。絶対。それくらい、おいしいから。

じつちゃんと糖をこいて島に渡り、ガザミというワタリガニを捕る。前の晩に仕掛けて朝に揚げると、15匹も20匹も捕れた。

貝もオノガイ、マテガイなど。これらも天ぷらがうまかった。タコでもマダコや手長タコがおつて、ウナギもよかった。

広島湾の魚介類で一番目がカキなら、一番目はイワシ。刺身、天ぷらがうまい。3番目はチヌ(クロダイ)。独特においがするが、調理してそれを除けば味そのものはタイリウまいと思う。チヌ飯という丹那に伝わる伝統的な炊き込みご飯もある。

私は広島湾北側を「箱庭の海」と名付けた。カレイやアイメアアナコ、ウミタナゴ、ギザミ、キスと、いろいろな魚がカキの周りの周りにいる。近年はアマモ場が少なくなり、メバルやカレイ、カワハギが減ってきた。箱庭の海で取れた地物の魚は最近、広島湾の市場でもくわすか。近海物といっても、山口や岡山などから来る。私たち漁師にはどうにもならない面もあります。

パネリスト

「魚三樓」主人
荒木稔雄

華道桑原専慶流副家元・料理研究家
桑原櫻子

元広島市丹那漁協組合長
川上清

コーディネーター
中国新聞社文化部長
渡辺拓道



松一色 △ 9頁の花▽ 仙溪

花型 行の行

花器 銅立花瓶

日本いけばな芸術展の歴史展示に
立てた立花。真の幹は自然の曲がり
である。正真の晒木が効いてくれた。

第47回 日本いけばな芸術展

テーマ「花という未来。」

会期 10月8日(水)～13日(月)

会場 大阪高島屋7階

1次展

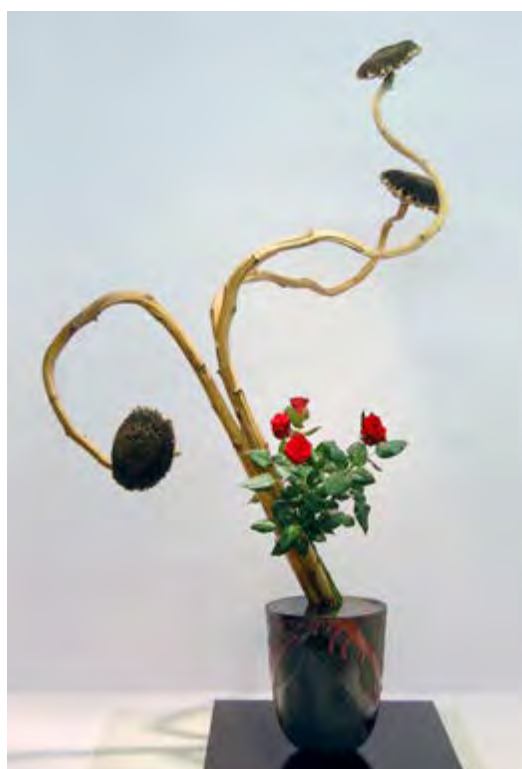
2次展

3次展

10月8日(水)～9日(木)

10月10日(金)～11日(土)

10月12日(日)～13日(月) 祝







出会い花（14）

仙溪

秋海棠

上臈杜鵑草

石清水のそばでしっとりと咲いている、そんなイメージでいけてみた。自分の中では上臈杜鵑草も秋海棠もそのような場所に生えている光景が目につかぬ。清水の周辺の空気は湿り気をおひて、葉はつねに潤っている。

秋海棠は中国原産の多年草。日本には江戸時代初期に渡来した帰化植物。ペゴニアの仲間特有の偏った形の葉をしている。

上臈杜鵑草は杜鵑草の仲間だが、花の形が全く違う。名前につけられた上臈は、仏教用語で年功を多く積んだ高僧のことをさすらしい。

ごつごつとした土っぱい花瓶に水を満たしていける。口の片側に寄せて水面が見えるように。こんな素朴な感じのいけばなが、意外と難しい。

花材 秋海棠（秋海棠科）

上臈杜鵑草（百合科）

花器 焼締花瓶

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2015 年

11 月号

No.629

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ぶらさがる

△2頁の花▽ 櫻子

春には美しい花の房を下げていた
藤も、秋になると剽軽な長細い実が
蔓にぶらさがっている。藤棚であれ
ば、さしずめ自然のシャンデリア、
ではないにしても、見ていて楽しい
気分になる。

とは云え、これだけ沢山ぶらさが
った枝をいけるのは容易ではな
い。重量バランスを考えつつも、花
は前方へ出すことで、藤の実のボ
リュームに負けない奥行きをつく
る。

取り合わせには4色のピンポン菊
を選び、藤色の杜鵑をたした。藤の
実にはカラフルなピンポン菊がよく似
合っている。

花材 藤の実（豆科）

ピンポン菊4色（菊科）

杜鵑（百舌科）

花器 市松模様陶花瓶

◆横から見た、いけばなの奥行き。



しなりの美

△3頁の花▽

櫻子

頭を垂れる稲穂を見ると、自然の恵みに感謝の気持ち湧いてきて、心の中でこちらも頭を下げています。

今年も新米の季節がやってきた。

この時期、花屋にも少量の黒米が売られる。赤米や黒米は古代米と名付けられてから栽培が増えてきたそう。うだ。いけばなでも独特の存在感が出せる花材だと思う。

私達の命の糧、その元の姿を愛でることもまた、心の糧となつて、より深く自然との関わりを感じることができる。

相手には、同じくしなる姿の上臈杜鵑に、大輪のピンクの菊を選んだ。

垢抜けた華やかさと可愛さを兼ね備えた菊は、恵みへの感謝の気持ち。

花材 上臈杜鵑(百合科)

黒米(稲科)

菊「飛驒マム」(菊科)

花器 籐花人(桑原健一郎作)



◆横から見た、いけばなの奥行き。



赤芽柳

△表紙の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 留流し

花器 耳付銅花瓶

赤芽柳は別名をフリソデヤナギ(振袖柳)とも呼ばれ、花芽が大きくなくて、赤い芽鱗片が落ちたあとの花穂はいかにも春らしい。

しかし、生花にいけるなら、まだ花芽が小さくて固い初冬がいい。日の当たる側、いわゆる日表は、枝肌も花芽も赤みが強いので、日表の側が手前になるようにいける。

本数多くいけるなら、銅器がよく似合う。

真(序)

留(急)



副(破)



基本花型にいける

主材 紫式部(紫蘇科)

※熊葛科から移動

副材 竜胆(竜胆科)

木苺(薔薇科)

花器 陶水盤

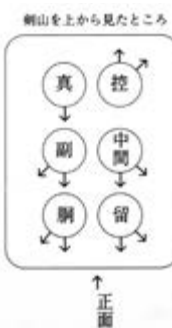
紫式部には枝が直立するものと横へ伸びるものがあるので、その性質にあわせて花型を考える。作例の枝は横へしなるような枝振りだったので、斜体型を選んだ。

一本の枝から十本以上の長い小枝が出ていて、そのままでは大きすぎるため、小枝を切り離していている。

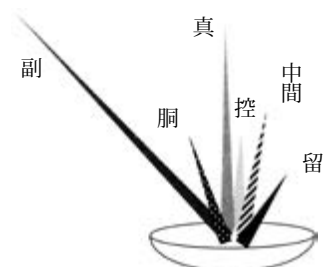
紫式部の実には茂った葉を合わせたい。秋色に色付きはじめた木苺(構母)はよく映る。白色と青紫色のしぼりの竜胆で、彩りを深めた。

◎剣山の主要部分の説明

それぞれの役枝を剣山に挿す場合、位置と方向は、およそ左の図のようになる。



斜体副主型



横から見たところ。





③ 中間の位置に竜胆を低めにさす。やや前傾させている。



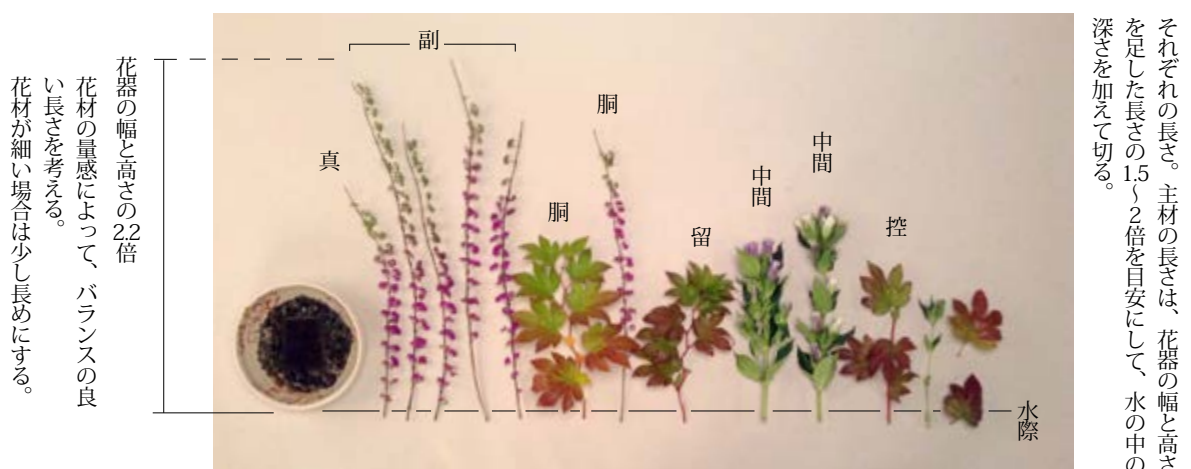
① 主材の紫式部の実を、いけあがりを想像して、副の位置に5本ほどさす。先まで実がない枝は適当に途中で切り縮めているが、自然な切り方を工夫する。



④ 留の位置に木苺を加えたところ。
中間にもう一本竜胆を立て、竜胆の脇枝と木苺の下枝を控の位置に加える。(4頁の花)



② 真の位置にも紫式部の実を一本立てて奥行きをつける。胴の位置に木苺を出す。副の伸びを引き立てつつ、水際を整える。同じく胴に紫式部の実も一本加えて、奥行きをつくる。



立花秘傳抄 五

立花名目 並びに 訓解 (つづき)

正心の事しょうしん

直心すくしん立の時たては、心の前に立つるにより、心かくしと名付く。除心のきしんの時ときは直なるもの一瓶のうちこれより外にあらざるにより、正心と名付く。また小心しょうしんとかく時は直心だいいしんの大にかわりてすなおなるを立つる心なり。

正心の高さは、松じん四尺ある時は、禿松かむらまつ二尺に立つべし。これ定法なり。梅、柳などの細き物ならば、高く指すべし。また心に梅、柳などを立つる時は、右の格を以て、正心よろしく立つべきなり。

除心のきしんの正心は心の前より立つる流もあり。また後ろより立つる流もあり。前より立つる時は、花形丸く、後ろより立つる時は、花形ひらめなり。

されば花形にしたがい、時によろしく立つべきなり。

心少し除のきたらば正心ほそきものを用ゆべし。広くのきたらば、大輪なるものを用ゆべし。心の幹ふときには柔らかなるもの、草の心には草を用い、水仙、杜若かきつばたは花より葉を高く、紫苑しおん、萱草かんぞうは下に葉をあしらう。南天、わくら、かなめの正心には口伝あり。つづじは下へつかいさげ、引き松は正心に用いず。檜ひのきは地生えを用い、薄は穂を用ゆ。草木にかぎらず出生の直なるもの、みな正心に用ゆべし。

副そえの事

副そえを古代は露つゆ請うけと名づく。云うところは外の枝より高く、心の葉陰はかげにのぼせて、松の雫を請うけると云う心なり。然るに中頃より副と云う。心にしたしく副のぼすると云う義なり。たとえば大將軍に副將軍あるが如く、一方の花形を守り、心に勢いあらするは、副そえの役やくなるべし。

副はやわからかに、しだれるものをよしとす。心すこしのきたらば、直すぐなるものを立て副そえべし。広くのきたらば、なびきたるもの、葉のなきものには茂しげりたるもの、水ぎわのきにはきおいたるもの、幹狂くまいたるには内副に立つべし。松の副は細くやわからなるを用ゆべし。或は大葉一枚にて副をあしらうもあり。

上手の副を付ると云うは、心にそうべき枝葉をよく見定め、出生のかたちにまかせ、念慮ねんりょを入れずして、そのまま副そえる時は、自然の景氣うつりておもしろし。初心の人は草をため、木をゆがめ、執着のころを以て、強いて副うるにより、立てて後まで、思慮しりょ分別のころ花にあらわれて、つたなく覚ゆるなり。巧者こうしやはこの域さかいをよくよく工夫すべし。

師語を作りて、副を付ることを教ゆ。副うて副わざれ、除いて除かざれ。誠にこれ中庸の道理にして、添いすぎたる時はいやしく、除きすぎたる時は、うつりあしきなり。

請の事

請と名の事、心の勢いを請持つという義なり。心おもき時は請おもく、心かろき時は請かろし。副しだれたるものならば、請はきおいたるもの、副きおいたる物ならば、請はしだれたるもの。心、副、直なるものならば、請は風流に狂いたるもの。竹の請には習いあり。

請は心に次いでの大枝にて、専ら賞翫する枝なれば時の珍花を用ゆべし。

見越の事

見越と名付くるは、山を見越して高木の梢を眺める心なり。されば庭前に山を作るに、見越あるが如し。さるによつて、小木高草を用いず。

見越と前置は前後の釣り合いにて、前置おもき時は見越おもく、前置短く出る時は、見越もまた心にそえて立つべし。

除心の見越は、そのみ左右高下をきらはず。正心こはきものならば見越やわからに、正心色なく細きものならば見越は花やかに、大手なるものを指すべし。

藤、南天などのしだれたるもの、見越に用いる時は、兼ねて見越所を広くあけ置き、幽玄体になびかして指すべし。梅、水木の細きものは、正心より高く立つべし。

流枝の事

流枝と云うは、水ぎわ低く横へ長く流るる景色あるゆえ、流枝と名づく。また長枝とも書くべし。一瓶の内ひくく出すもの、流枝を定法として立てる。これ水ぎわの習いなり。

草木の横へはえ出るもの、いづれも流枝に用ゆ。しかれども葉先勢いなきものは用いず。広葉のたぐいならず。梅のずわひ心得あり。苔晒木の流枝は、いかにも細きを用ゆ。

流枝の出口、きつくりと出すべからず。本にてきおい、中にて沈み、すえにてあがる様に指すべし。出口は花葉を以てあしらいかけ、いやしからぬ様に出すべし。

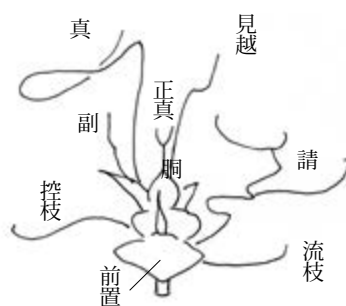
流枝は心と見合わせ、副と見合わせ、控枝と見合わせて、胴前よりのうつりを第一とす。

流枝は瓶の後ろ隅より出して、梢を前へふらす。然れども前置より前へは出すべからず。瓶の口より梢さがる事を嫌う。請と流枝の梢、同じきを嫌う。





◆斜め前から見た奥行き。



松の立花

仙溪

花材 松 あらぎ 木瓜 糸菊

晒木 小菊「赤頭巾」
いかりまゆみ
毬栗檀

花器 銅立花瓶



生花

葉蘭九葉

仙溪

花型 行型

花器 煤竹竹筒

九月の家元研究会では、葉蘭九葉の生花を稽古した。テキスト613号、616号にも葉蘭の解説があるので見返してほしい。出生や独特の深みについて書いている。

葉蘭の生花は数多く活けられることが大切で、巧みな葉つかいの技巧を自ら体得して、自らがその技法を開拓してゆくような研究態度がないと、美しい花形は作れるものではない。これは方法を知ることではなくて、自らが切りひらくような技術の生花である。理解すれば意外に簡単なものだが、それを理解しようとする熱意と努力が最も必要な生花である、ということを知らねばならぬ。

〔専溪生花百事〕より抜粋

真(序)

留(急)



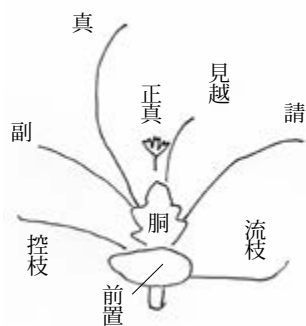
副(破)

◆横から見たところ。





◆横から見た、立花の奥行き。



丸葉の木の紅葉を真、請、控枝に使っている。稽古で立てた初歩的な立て方だが、秋らしい色彩の立花だと思う。

立花
まるば
丸葉の木 (紅満作) 仙溪
花型 行の真
花材 丸葉の木 檜扇の実
杜鵑 数山査子 竜胆
糸菊 嵯峨菊 (園芸種)
花器 陶花瓶



出逢い花（24）

仙溪

野茨の実（薔薇科）
けいとう
鶏頭（見科）
けいとう

赤い実には赤い花を出逢わせて、黒い器に付けてみた。

撮影のあと、床の間に飾ったが、水辺の黒い杭に留まる鳥の絵の軸とびつたり合っていた。いい出逢いが生まれたときは、素直に嬉しい。

花器 黒釉陶花器

陰陽五行

現在使われなくなった旧暦（太陽暦）に興味を持つと、陰陽五行思想にゆきついた。日本文化に携わる者として、そんなものもっと早くに知っておけ、とおしかりを受けそうだ。

今、吉野裕子著「陰陽五行と日本の民俗」を読んでいるところだ。まだ最初の数ページだが、とても難解。でも非常に面白い。古代の中国で生まれた哲学だが、天地のはじまりも陰と陽で説明でき、木・火・土・金・水の五元素（五気）の作用と循環、すなわち五行によって、万物が生成され、自然界が構成されている、というもの。

要するに陰陽五行の法則を知っていると、自然のことがストンと理解できるのではないか。そうだとすると、修める価値は非常に高い。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
11 月号
No.641

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





メラレウカ

仙溪

花材 メラレウカ（フトモモ科）

リコリス（彼岸花科）

ダリア（菊科）

花器 陶コンポート

メラレウカはオーストラリアの樹木でユーカリと同じくフトモモ科。作例のように黄金色になるものや赤くなるものなど種類が多く、芳香があつてハーブとしても利用される。オレンジ色の器にたっぷりのメラレウカを集めて、リコリス、ダリアで色の濃淡を楽しんだ。

メラレウカの木。大阪花の文化園。



横から見た奥行き





ムラサキシキブ

櫻子

花材 むらさきしきぶ へまつつら 紫式部(熊葛科)

じょうもく じょうもく 上臈杜鵑(百合科)

あきざくら 秋桜(菊科)

花器 陶花瓶

ムラサキシキブのような色の実はいかにあるだろうか。独特の美しさがあつて好きな花材だけれど、とり合わせに悩む。でも今回のとり合わせは自分でも気に入っている。

紫とは反対色の黄色。そこに桃色が少し加わることで紫の鮮やかさが増した。

立ち上るムラサキシキブと垂れ下がるジョウロウホトトギスの形の対比も面白い。コスモスの優しい葉の緑が、紫色の小さな実の足元をほどよく包んでくれた。

濃色の艶やかな花瓶が、色彩の引き締め役になつてくれた。

横から見た奥行き





赤い実に紅葉を

△4頁の花▽

桜子

花材 鈴薔薇（薔薇科）

木苺（薔薇科）

薔薇（薔薇科）

花器 三足蓋付陶深鉢

赤い実に紅葉が重なる、互いの相乗効果でより強く秋を感じられるのに加えて、実と花だけでは表現できない華やいだ明るさを感じることが出来る。そしてなによりも実の表情が優しくなるような気がする。

秋色を際立たせようと、純白のバラをとり合わせた。子孫を残す実とやがて散る赤い葉と大きく咲こうとする花の対照が美しい。

3種の花材を料理するような気持で、鍋型の器に付けてみた。

横から見た奥行き



梅擬と紫蘭

△表紙の花▽

桜子

花材 梅擬（繡の木科）

紫蘭（蘭科）

白椿（椿科）

花器 耳付陶花瓶

梅擬の小枝を使つて軽やかな投入にしたいと考え、色付き始めた紫蘭をとり合わせて、白椿で口元を引き締めた。

梅擬の艶やかな赤い実に白椿を添えると、凛とした美しさが生まれる。そこに紫蘭が加わることで雰囲気はずいぶん変わって見える。表情が柔らかくなり、優しさが加わる。

器も優しさを感じるものがない。ほんのり赤みのある温かな風合いの陶花瓶を選び、朱の敷板に飾った。

横から見た奥行き



京都市芸術文化協会創立35周年記念事業
 京の文化絵巻Ⅰ
 花鳥風月

会期 9月11日(日)

会場 ロームシアター京都

「鳥」の部 華道 桑原仙溪

邦楽、邦舞、洋楽、モダンダンス、能楽、狂言、書、今様、華道。総勢150人による舞台に参加させていただいた。杉信太郎さんの横笛に合わせ、今様の舞手に介添えをしていただき、雌雄の鳥をイメージした花をいけた。器は柳原睦夫氏の銀オリベ。花材は2.5mのカナリー椰子の新芽など。命の躍動を感じていただけたと思う。



立花秘傳抄 一

常磐木とぎわぎ之部 (つつき)

棕櫚しゅろ

非祝言。上。

正心、副、請。

朝鮮棕櫚は胴にも用いる。

棕櫚竹また面白き物なり。さりながら客花

には用捨すべし。

詩に曰う。棕櫚しゅろの葉散さんして夜叉かしらの頭。

古歌

朝またき梢はるかに音つれてすろの葉過
るむら時雨かな

杉

非祝言。上中。苔、晒木用いず。

古歌

いつしかに神さひにけりかく山の鉾杉か
もと苔のむすまで

苔を遣いても苦しからざる證歌ありといえ

ど、古来より苔を付けて立てる木、法式の外は
これを許さず。然れども自然と苔の付きたる心しん
あらば、外の苔木こけを借り用いてもくるしからず。

古代は賀茂かもの神杉とて、若木の色よき、葉の
茂りたるをもとめて多くさされしと師の云え
り。然るに近頃は杉は魔のすむ木なりとて立て
ざるもおかし。詩に作り、歌に讀みてやさしき
物なれば、今様にこれを用いる。されども客花
には用捨すべき物か。

うすの木 夏ばせ

祝言。

胴、流枝、控枝、前置。

幹太きは請にも用いる。

この二木、春の暮れより秋の半なかばまで紅葉
するゆえ、照葉てりはと名付けて瓶毎に用いるなり。
かならず葉先をつくろい、葉を重ねて見事
に見せんとすることなかれ。照葉はやわらか
に軽く立てるをよしとす。

ふしくろ

非祝言。下段。

栗の若ばへ

祝言。下段。

檜の葉

祝言。下段。

まゆみ

祝言。中下。

衛矛まゆみ、鬼箭まゆみ。

猿すべり 猿滑

非祝言。中下。祝言に用いず。

證歌

足引の山のかげちの猿なめりそれらかに
ても世を渡らばや

柞

祝言。中下。

木ふときは請にも遣う。

櫛木（多識）。

四聲字苑に云う。梳を作る。藻塩草にこな

ら栢、これ柞なり。

今回出てきた棕櫚を使っているのは二図あり、第

三十二図・棕櫚真砂の物は以前掲載したが再び載せてお

く。雄株に棕櫚の古い株を立て、そこから若木が生まれ

た姿。棕櫚の素直な広がり、雌株の屈曲した晒木でバ

ランスをとっている。

第四十一図では棕櫚が見越と副に大きく使われ、請に

さらりと夏櫨を出している。竹型の器が目を引く。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』（日

本華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二巻』（大日本華道界刊

思文閣出版刊）

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）



第三十二図

二株砂物 棕櫚真

砂の物行の花形 西村松庵

棕櫚 百合 晒木 松 苔 嫩 杜若

小羊齒 栢植 苔木



第四十一図

立花 松除真 高橋吉兵衛

松 棕櫚 夏はぜ 杜若 檉木

躑躅 著我 下野 嫩 晒木

柞（さく、なら、ははそ、いすのき）原文にルビが無いので読み方不明。

早蓮木^{かんれんぼく}

花材 早蓮木^{ぬまみずき} (沼水木科)

木苺^{もも} (薔薇科)

ピンポン菊^{ピンポンキク} (菊科)

赤色
黄色

花器 練込陶花器

(写真①)

①





赤い実と菊いろいろ

仙溪

花材 野茨^{のいばら}（薔薇科）

白糸菊 黄飛驒マム

スプレー菊 小菊（菊科）

花器 陶花瓶

先月号で兵庫サンバマムと梅擬^{うめもじぎ}の盛花^{ひだ}を掲載したので、今月は飛驒マムを一本混ぜて野茨と投入にした。

野茨を広げた間に、前方へ長く4種類の菊を出している。

飛驒マムには多くの品種があるので特徴を一言では言いにくいですが、ダリアのようなモダンさと、茎も葉も大切に育てられた和の姿の両方を兼ね備えた菊というところか。

菊は咲ききった後、水溜に浮かべて楽しんでいる。





水仙一色立花

△10頁の花▽

仙溪

花形 水仙一色立花 真の行

花材 水仙（彼岸花科）

小菊（菊科）

花器 陶立花瓶

水仙の季節がやってきた。まずは真の花形で水仙一色立花を立ててみた。

葉に針金を入れ、自然な葉の動きを想像しながら形をつける。カクカクして、針金が入っていると分かってしまうようではいけない。といって形をつけず真つ直ぐなままではかえって不自然だ。怖がらずに曲げてみるのも大切である。

藪山査子

△11頁の花▽

仙溪

花型 草型 副流し

花材 藪山査子（雪の下科）

花器 煤竹竹筒

今年の10月は藪山査子の稽古が続いた。この写真は最初にいたもので、別れ枝を副に選んで、伸びやかな枝の動きを生かしている。この後5作いけたが、どれも違う感じに上げ上がった。その都度枝の個性も変わるのだから、納得のいく姿にいけるのはなかなか難しい。散らずに残った葉がアクセント。



ゴンちゃん先生と レモン師匠

日々のいけばなを紹介したくて、家で飼っていた猫のゴンちゃんの写真を混ぜ「ゴンちゃん花日記」というブログを始めたのは、私が家元を襲名した年だった。その後ゴンちゃんがお星様になり、3年後にレモンがやってきた。今は「ゴンちゃん先生」と名のつてインスタグラムという所に写真を投稿している。いつも花を見に来るレモンは皆に愛され「レモン師匠」と呼ばれている。

猫に助けられ、時には教わることも多いわけだが、花も猫も人間も命を育む仲間なんだなあと、しみじみ感じている。今後とも、ゴンちゃん先生とレモン師匠のコンビをよろしくお願いします。





出逢い花（35）

仙溪

南瓜（瓜科）
かぼちゃ

葉鶏頭（鳶科）
はげいとう

花器 天目釉酒器

岡山の原田先生から今年も南瓜をいただいた。なんともいえない存在感があったので、出逢い花の片方の花材として使わせていただいた。

出逢わせしたのは小さな鉢で売られていた葉鶏頭。葉鶏頭を切って酒器にいけ、南瓜の横に置くだけで絵になってくれる。でも折角なのでもう少し面白い出逢わせ方はないかと考え、南瓜の上に乗せてみた。

写真のようになったわけだが、自分ではこれでいいのかどうかよく分からない。分からないけれど、自然の恵みに対する感謝の気持ちをこめて、大切にいけた結果なので、写真に撮ることにした。

いただいた箱からこの南瓜が出てきたときに感じた神々しさよりも、どちらかと言えば剽軽な感じになってしまった。でもひよっとすると、南瓜の原産地、中南米の森の神様はこんなお姿かもなどと、想像して楽しんでいる。

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2017 年

11 月号

No.653

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





枝垂れを楽しむ

△2頁の花▽ 桜子

花材 更科升麻・晒葉升麻

(金鳳花科)

山鳥兜 (金鳳花科)

木苺 (薔薇科)

花器 陶花瓶 (林平八郎作)

サラシナショウマの伸びやかな白い花穂は、一本一本かたちが違って自然味がある。とり合わせにも、自然の風合いが感じられる相手を選みたい。長く枝垂れたヤマトリカブトと共に長く前へ出し、足元に色付いた木苺を加えて両者をつないだ。

横から見た奥行き





ダンシング・レディ
ス・ジンジャー

△3頁の花▽ 桜子

花材 グロツバウニティ

(生薑科)

アンズリウム(里芋科)

夏櫨の実(躑躅科)

花器 白磁花瓶

ピンク色のやじるべえが幾つも繋がっているみたい。その手の先に黄色い花が顔を出している。非常に個性的な花だ。グロツバ・ウニティはジンジャーの仲間で、ダンシング・レディ・ス・ジンジャーとも呼ばれる。たしかに女の子達が両手を広げて躍っているような花だ。

淡い花色なので、深紅のアンズリウムを合わせると華やかになる。季節感を加えたくて、夏櫨の実だけになった枝を覗かせてみた。グロツバと一緒にステップを踏んでくれるみたいだ。

横から見た奥行き





水仙一色立花

△4頁の花▽

仙溪

花型 立花 行の行形
花材 水仙（彼岸花科）
花器 陶花瓶

昨年は二条城の二の丸御殿で水仙の立花を撮影する機会を得た。歴史を感じる場所にあわせて、立花時勢粧の絵図にある水仙一色立花を再現してみたが、葉が自由奔放に伸びていて、しかも絶妙なバランスを保っているのに驚かされた。

今年の1月末、淡路島の灘黒岩水仙郷へ自生の水仙を見に行った。180年前に海岸に漂着した球根を漁師が山に植えたのがはじまりで、今では500万本の野生の水仙が斜面に咲き乱れる。

大雪のあとで倒れているものもあったが、再び立ち上がろうとする姿は立花図の水仙そのものであった。波打つように伸びるものや、180度方向を変えるもの。自然がつくる造形は予想を遙かに越える。



淡路島の灘黒岩水仙郷にて

深山栂 みやましきみ

非祝言。非通用。水際に用いる。

深山は名を指すとて、水際の奥深く、又は前にも木かげに立つべきなり。草留の方に指さず。草は野なり。みやまにあらず。又景気もうつらぬものなり。

たちばな

祝言。非通用。水際。

燈籠草 おうちつき

祝言。水際。

異名、洛神珠、紅姑娘。
らくしんしゅ こうこうぢやう

和名、ぬかづき、少人女中の客に必ず用いる。

えびついでら

非祝言。水際は控に宜しい。
よう

南天

通用の部に詳らかなり。

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第七十八図

立花 松除真

富春軒

松 柳 梅 水仙 栢植 椿 多羅葉 たらよう 伊吹 著栽



「立花時勢粧・中」の最後を飾る富春軒の立花。立ち上る松の真は七十三図に似るが、こちらは真の出口が高く除きも浅い。左右の枝垂柳と松の形の対称が見事だ。その間の赤い実は「たらよう」だと思いたい。タラヨウはモチノキ科の常緑樹。別名ハガキノキで葉裏に文字が書ける。立花の魅力を伝え続けてほしい、との思いが込められているのでは。

高松・栗林公園

香川県は古くから讃岐国と呼ばれる。これは、国の形を見た時に、四国の他の国に比べて横幅が狭いことから「狭緯」(緯^{さのき}東西の距離)と呼ばれていたのが、「讃岐」に変わっていったそうだ。

讃岐といえば、「讃岐三白」とよく云われるけれど、三つの白いものが何かと聞かれて正確に答えられるだろうか。正解は綿、砂糖、塩である。讃岐は晴れの日が多くて雨が少ないため、常に水不足と闘ってきた。米作りのために作られた溜め池は一万四千余り。そのようにして苦労して米をつくる一方で、自然条件を

生かした特産物として生まれたのが綿と砂糖と塩であった。

綿花や砂糖黍は、温暖で雨の少ない気候に適した作物。そして塩づくりに幅広い遠浅の海岸と晴天の日が多いところがむいている。

近年「うどん県」と呼ばれるほどのブームとなっている「うどん」。こちらも日照時間が長いいため、古くから二毛作によって小麦の生産が盛んで、うどんに慣れ親しんでいたことも背景になっているようだ。

さて、10月はじめに高松を訪れたのは、日本いけばな芸術四国展のためであったが、朝の手直しのためとは高松周辺を散策することができた。

イサムノグチ庭園美術館、屋島寺港の倉庫跡を利用したアートスポット、とても長いアーケード商店街うどん屋、骨付き鶏なども堪能した。どれも印象に残るものだったが、とりわけ感銘を受けたのが「栗林公園」である。

高松港から南へ約3キロ。紫雲山の東麓に位置し、面積75ヘクタールは文化財庭園としては国内最大の広さだそう。四百年近い歴史をもつ大名庭園である。

なんといつでも低く抑えられた松の見事なこと。香川といえは鬼無や国分寺という松の産地が有名だが、松の生育に適した土壌と、松の手入れ技術が優れているのだろう。

栗林公園では丁度松の選定作業をされていたが、一千本の松の手入れはさぞ大変なことだろう。庭園内の小川では、丸石についた藻を5人の男性が籠で一つ一つ丁寧にこそぎとっておられた。気の遠くなる作業である。

昔、飢饉のとき、高松藩2代藩主の松平頼常は被害に遭った人々を雇って庭園拡張をおこなった。雇用を生んで民を救ったわけだ。そんな藩主が愛した庭園ゆえに、高松の人々も愛着と誇りを持つ

ているのだろう。貴いことだ。その土地に根ざした文化の底力を感じた。いつかは是非とも鬼無の松栽培も見てみたい。



栗林公園にて。①南庭全景。②松と。③薩摩藩寄贈の蘇鉄。



丁字草 山鳥兜

〈9頁の花〉

仙溪

花型 生花 株分け

花材 丁字草 (夾竹桃科)

山鳥兜 (金鳳花科)

花器 陶水盤

楓の紅葉、銀杏の黄葉、ほかにも様々な植物の葉が秋色に変わる。きつと皆さんにも、この季節になると心待ちにする色があるのではないだろうか。

四国の花展でいけたオカトラノオの紅葉も心に残る色彩だった。

作例の丁字草も、その繊細な美しさは他の枝には無いものがある。黄色、オレンジ色、赤色、いろんな色の葉が混ざっている。ヤマトリカブトの紫色とは相性がいい。水盤で株分けにして、秋の輝きを楽しんだ。

カラスウリありがとう

〈表紙の花〉

仙溪

花材 烏瓜 (瓜科)

杜鰓草 (百合科)

薄の穂 (稲科)

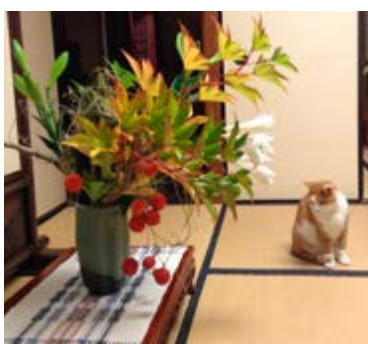
花器 陶手付花器

カラスウリを葉がついたまま活けたのは初めてだ。これは丁度テキスト撮影に合わせてお弟子さんが届けてくれたもの。長い蔓の切り口の水をあて、一本ずつビニールに入れて大切に持って来て下さった。さぞ蔓

を外すのに苦労されたと思う。葉はすぐに萎れてしまったけれど、こうして写真に納めることができた。なんと贅沢なことだろう。いけばな冥利に尽きる思いだ。

その後、枯れた葉を取り去って、相手を変えながら、すでに一ヶ月以上いけて楽しんでる。写真では緑色だった実も真っ赤になってきた。カラスウリの種は大黒様の形なのだが、そろそろ取り出してみようかな。

横から見た奥行き



秋色を楽しむレモンちゃん。花は烏瓜、鉄砲百合、木苺。

創立50周年記念
日本いけばな芸術四国展
テーマ「半世紀の夢を咲かせて」

会期 10月5日(木)～10日(火)
会場 サンポート高松 玉藻公園・披雲閣 栗林公園

①



②



④



③



⑥



⑤



⑧



⑦





シーグレイプ 櫻子

花材 シーグレイプ（たぐ 蓼科）

アメリカネス（彼岸花科）

花器 ガラス花器

シーグレイプは浜辺葡萄とか心葉とも呼ばれる。丸い団扇のような葉が面白い。赤と黒のどつしりしたガラス花器にいけると、葉の葉脈の赤色が際立つ。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2018 年

11 月号

No.665

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





小鳥の耳

△表紙の花▽ 仙溪

花材

鴨上戸の実 (茄子科)
ひよどりじょうこ

ガガイモの花 (ガガイモ科)
すずき
薄の穂 (稲科)

花器

銅花器

鳥の耳がついた銅器に二種類の蔓植物をいけた。写真に撮ると、赤い実を食べにやってきた小鳥に見える。花をいけると物語が出来上がる。そんな器の一つだ。ハート形の葉はガガイモの葉で、小さな星型の花が咲いている。小鳥目線のいけばな。



横から見た奥行き

山芍薬の実

△2頁の花▽ 櫻子

花材

梅花躑躅 (躑躅科)
ばいかつじゆ
山芍薬の実 (牡丹科)
やましやくやく

桔梗 (桔梗科)
ききやう
公長齋小菅籠
こうちやうさいこすかかご

花器

公長齋小菅籠

今年の秋一番きれいなヤマシャクヤクの実。みずみずしい葉に包まれ



横から見た奥行き



横から見た奥行き

ピンク色の実

△3頁の花▽

仙溪

花材 真弓の実まゆみ (錦木科)

菊2種 (菊科)

花器 三角錐陶花器さんかくすい (宮下善爾作)

マユミの実をはじめて見た時、なんて可愛い色をした実なんだろうと思った。とても優しい薄紅色である。ピンクの二輪菊と金茶色の菊を合わせて季節を味わうことにした。

るように育った一輪。弾けて赤(未成熟種子)と紺(種子)の実が派手に色を競い合う。春に清楚な白い五弁の花を咲かせていたとは思えないくらいに強さだ。大好きな公長斎さんの籠に飾った。

第51回 日本いけばな芸術展

テーマ「みらい、かける。」

10月3日(水)～8日(祝)

大阪高島屋7階

①



③



④



②



⑤



⑦



⑥





京都市自治記念式典
オープニングパフォーマンス
会期 10月15日(月)
会場 京都ロームシアター
曾和鼓堂さんの小鼓とのセッションで舞台上で花をいけた。(写真⑧)

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

早百合草さゆり

祝言。真に立てず。また出生、直ならざる
ゆえ正心に立てず。請、副より遣い下げて控
枝までさがるなり。

この花早く咲くをもってこの名有り。

笹百合草。(その葉笹に煮たるをもって名
付く)

本草綱目に云う、専ら百病を治す、故に百
合草と名付くと、云々。

この花たおやかに葉つき面白し。一瓶に五
本七本つかうとき同じようにならず。ひらき
たる花、つぼみ、中ひらき取りまぜ、請の花
空にむかいたらば副はうつぶき、右の方後ろ
むきたらば左は前にむかわせ、葉出生そむに背か
ず取り合いて一面に見る時、花々よくおもい



あいたるをよしとす。もし一輪にても、外の
花と不相応なるを独遊どくゆうとて嫌うなり。
ひとりあそび

早百合草は花のしべの黄なるをとらざれば
花そまりて見ぐるし。

第四十二回

立花 松除貞

濱崎九左衛門

松 晒木 百合 柏 夏はぜ 柘植

小菊 小羊歯 杜若 薺栽

葉たれさがる事あらば、竹のはりを指して
葉並びをつくろうべし。たむるには針がねを
用いる。

姫百合

祝言。

上より遣いさげては、水ぎわまでさかると
いえど短く指すことを嫌うなり。

異名、山丹花。さんたん連珠。れんしゆ紅花菜。こうかさい

和名、ひかり草。

古歌

夏の野を心しつかにわけ行は花とおとろ
く日かり草かな

姫百合やわらかなる物ゆえ、正心に立てる
時は物にたよらせて立つべし。惣て草の正心
には後ろより松をあしらう師伝なり。

すかしゆり
洗百合草

祝言。心に用いず。上中。

越後すかし。べにすかし。そとの浜洗。心
に用いる百合草はこの三色ばかりなり。

あたご百合草
祝言。上中。

さかりゆり

祝言。上中。



第四十三回

立花 晒木除真

三好理兵衛

晒木 松 百合 薄 菊 檜木 夏はぜ
檜扇 小羊齒 伊吹

ためども
為朝百合草

祝言。上より中まで。

鬼百合に対して名付く。富士ゆりとも、うたゆりとも所に替わりて名異なるなり。

鹿子百合草

祝言。上中。

この百合草水ぎわに遣うことを嫌うといえど苦しからず、口伝あり。然るに当世は習いもなく遣いさげる。似たることの似ぬ事なり。この花にかぎらず大輪なる花、遣いさげて苦しからず立てようあり。師に会つてたづねるべし。

百合が使われているのは13作。そのうち3作を紹介する。第42図は再掲載となるが、太い松の幹と晒木に百合と杜若が添い出ている。第43図は百合、菊、檜扇が太い晒木と共に立てられている。どちらにも晒木が使われて、山間の草地で咲く花の風情をよく捉えている。第44図、45図は床脇の棚の上下2作で、棚の上の胴束と呼ばれる小型で横長の立花に百合が使われている。棚の下のだっしりとした株分け砂物には杜若がいけられている。棚の下に杜若、上に百

合という配置は、麓の水辺から山中へと続く景色の移り変わりを感じさせる。

百合の蕊は取るように書かれているが、現在ではきるだけ残して自然を損なわないようにしている。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

『花道古書集成 第一期第一巻』

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

第四十四図(上)

胴つか(胴束) 檜除真

知休

檜 松 百合 檉木 夏はぜ 著我

第四十五図(下)

二株砂物 松真

中川常意

松 檜 苔木 伊吹 晒木 杜若 柘植

熊笹 小菊 著我





下がる上がる

〈9頁の花〉 仙溪

花材 垂柳すいりゅう（柳科）
岡虎の尾おかとらのお（桜草科）

花器 銅花器

花展に出品した生花をいけ直した
もの。花展ではトリカブトを覗かせ
ていたが、オカトラノオに変えたら
随分良くなった。スイリユウヒバは
糸状の葉が枝垂れるので、勢いよく
登る姿の花の方が相性がいいよう
だ。下がる物には上がる物を。

横から見た奥行き



永観堂禅林寺 新法主晋山式
10月14日、永観堂での晋山式に立
花一對を納めさせて頂きました。





穂に穂

△10頁の花▽ 櫻子

花材 ベルグラスモール(稲科?)

栗(イネ科)

木苺(薔薇科)

花器 陶水盤(柳原睦夫作)

稲、粟、黍、蜀黍に薄、洋種のパ

ニカムなど、秋には穂をいけることが多い。2種類の穂を立ててみるとこれが意外に面白い。紅葉したキイチゴを足元にいけると、穂が主役のいけばなになった。色んな穂の組み合わせで秋を楽しもう。



横から見た奥行き

広がりと集まり

△11頁の花▽ 仙溪

花材 錦木(錦木科)

スプレー菊(菊科)

花器 陶花瓶(市川博一作)



横から見た奥行き



ニシキギの葉が緑色から赤色へ染まっている。敢えて面で見せて扇状に広げたところに深い赤色のキクを集めて挿した。ニシキギの葉が俯かないように気をつける。

プリンスホテル会員誌 エスコート

グランドプリンスホテル京都でのいけばな体験を紹介。宿泊客がお茶とお花を体験できる。普通なら習えない先生の指導を受けられる贅沢な企画なので、是非問い合わせを。



レモンだより

健一郎&レモン。2人は仲良し。





シダレソリダコ

△12頁の花▽ 櫻子

花材 秋明菊（金鳳花科）

枝垂れソリダコ（菊科）

丸葉の木（満作科）

花器 手付竹籠

はじめていけるシダレソリダコは
まるで打ち上げ花火のようだ。広がる
黄色い小花の間を真っ直ぐにシュ
ウメイギクが昇って行く。秋草たち
の競演。



横から見た奥行き



家庭画報 11月号

桑原櫻子が廣誠院の幻の京焼きを紹介。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
11 月号
No.677

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





かぼちゃのかたち

△2頁の花▽ 櫻子

花材 木苺(きいちごぼら)
(薔薇科)

花茄子(はななす)
(茄子科)

透し百合(すかしゆり)
(百合科)

花器 陶花器

ナスやトウガラシの仲間、花ナスや花トウガラシとして、昔からいけばなの花材に使われてきた。

暑くて枝ものない時に代りとして使う事もあったが、葉がついていないので、中々きれいに見せるのは難しく、苦手な花材だ。

かぼちゃ型の平たいかたちの実が枝に並ぶ。観賞用のナス科の品種でソラナム・パンプキンと呼ばれる。ナスとトマトが混ざったような感じ。食べても美味しくないらしい。大学の講義でいけてみた(時々講師としてお呼びがかかる)。キイチゴの紅葉した葉を添えると瑞々しく、秋らしい花になる。面白い花たちが学生達にも喜ばれた。

横から見た奥行き





出逢い花 (35)

仙溪

しろやまぶき
白山吹 (薔薇科)

どうだんつじ
満天星 (躑躅科)

花器 陶花瓶 (清水美菜子作)

どちらも枝一本ずつでいけている。ドウダンツツジは立派な枝の脇に出た小枝を切ってもらった。日頃から花屋と親しくしておくと、こういう時に無理を聞いてもらえる。紅いドウダンツツジのとなりに鮮やかな黄色の葉が見えた。シロヤマブキの黄葉である。枝先に黒い実が光っている。これら二つを手にとってみる。すでに出逢い花ができていた。

シロヤマブキはバラ科シロヤマブキ属の落葉低木。葉が対生するのでヤマブキ属のヤマブキと見分けがつく(ヤマブキは互生)。またヤマブキの実の実は暗褐色になり、ヤエヤマブキには実がならないと覚えておこう。

横から見た奥行き





妖怪礼賛

△4頁の花▽ 健一郎

花材

早蓮木 (沼水木科)

杜鵑草 (百合科)

スプレー菊 (菊科)

花器

手付籠

小学校四年生の頃にマンシヨン住まいの母の元を離れ、六角の家で暮らしている。昔ながらの日本家屋のため、マンシヨンでは感じ得ない何かを強く感じる。特に夜に強く感じる事が多い。その正体の一つに影というものがある。影は幼い頃の私によく畏怖の念を抱かせた。ただ怖いだけでは無く不気味だが興味を持たせられるアレである。

影は正確に間違ふことなくシルエットを切り取る。普段目に見えている物でも、影を見ると本当にその物なのかと見紛えたかと感じるほどに、刻一刻と多彩な表情をしている。光が当たっていないだけの世界の魅力は底が知れない。陽が沈んで電燈が消えると全く違った表情を見せる。昼間と同じ家だとはとても思えない。妖怪や幽鬼やを想像する事ができたのは神秘とも言えるべき闇と向き合っていたからであろう。明かりを灯した途端に妖怪は何処かへと消えてしまう。

京都に限らずだが、夜道を歩くと

多くの人が、自分の顔を照らしながら歩いている。高速で光が往来し、街灯が影を消している。これらによって引き起こされる、妖怪の住む世界の縮小は、これからの世代の人にとって、想像力の貧困に繋がってしまうかも知れない。まるで分からない事があってもはならないかの様に光をあて影を取り除く行為は、次第にグレイゾーンをも無くしていく。幾ら考えても分からず、答えが出ない喜びはこれから時代を追うことに無くなっていく。○でも×でも無い△が正解かも知れないのに…。

自分の力を越えた物に感じる怯えと美が密接な関わりを持つ事を実感しつつある。そこに一縷の怯えがあることは確かだが、畏怖の念と美しいという感情には共通する所が多いのでは無いかと考えている。

同じ花を生けたとしても自分が花のことを分かったつもりで生けている作品は程度が知れている。そこに複雑性がなく、ミステリアスな空気感を纏っていないからだ。理解できてしまっただけはいけない。慢心せず、奢らずに少しでも歩み寄るのがいい。魅力的なグレイを引き出せる華道家がいてもいい。

烏瓜の実

〈表紙の花〉 仙溪

花材 雪柳（薔薇科）

梅（松科）

烏瓜（瓜科）

花器 陶花器（市川博二作）

今年もカラスウリの実をいただいた。青い葉がついた状態で蔓を束ね切り口に水を当てて一本ずつビニール袋に入れてある。庭の柿の木と楓にからみつくそうだが、蔓を切らないように解くのは大変だろう。

いただいたカラスウリはまず適当な木の枝を支えにして投入で楽しんで。半日は葉も瑞々しいが、翌日にはカリカリになっているので何か葉の繁った枝を加えたりしている。

写真は枯葉を取り去ったカラスウリの蔓をツガの枝にひっかけて実をぶら下げ、紅葉したユキヤナギだけを加えて、シンブルに赤い実を目立たせた。

古く唐から伝来した朱墨「唐朱」の原料鉱石が朱赤色で卵形のものもあり、それに似るので唐朱瓜。やがて烏瓜に。



肉◎キノコ×

健一郎

私は肉が好きでキノコが嫌いだ。特に好きな肉は牛肉で特に嫌いなキノコはシイタケ。祖父と倉敷国際ホテルで2人で食べた300グラムのステーキが1番のお気に入りです。給食で昼休みの終わりでまで食べさせられたシイタケは大の二ガテ。私の特技のうちの1つに物事の合理化というものがある。自分に対して都合よく物事を捉える能力だ。

好きなものだけを食べ、嫌いなものは食べない。毎日食べる食事の時間を心の底から楽しむ。好きなものだけ食べて生きている。

食へのこだわりは祖父の影響も強いが、副家元の影響が大きい。数日に一度自分の好きな食材を買い溜め、毎日好きなものを作る。自分の好きな味をこさえられる事がすごいと素直に思う。あくなき食欲が彼女を動かしている。本人がよく言っているが飽きっぽいので、嫌でもおかずのレパートリーが増えるそうだ。日本、中国はもちろん、ハンガリー、フランス、ロシア、ベトナム、スペイン、ジョージアなど底が知れない。数あるレシピその中にも美味しい物と格別に美味しいものに分類される。格別に美味しい料理はレギュラー入りとなり、二ヶ月に一度ぐら

いのペースで頂ける。彼女の料理の凄さは豪華で派手な食事だと小さい頃に感じていた私だが、基本の料理のレベルが尋常ではないのだ。きんぴら、おからなどの一品料理が本当に美味しい。

好きなものだけを食べてきた私には、偏った持論がある。好きなものは一番好きな人が食べればいいというものだ。例えば、家族で困ったデューブルの大皿にお肉が一切れ余ったとする。その肉の事が一番好きな人が食べればいいという考え方だ。自分が一切れ余った肉を食べたいがための合理化なのは認めるが、実際に食べられる側からするとまだ一番マシなのかなとも思っている。

これでも食べ物への敬意、感謝はしようとはしている。嫌いなものを目を閉じて食べたり、鼻を摘んで食べるのは食べ物に対する失礼な態度だとはとらない。鼻を摘んで食べる行為がその後その食べ物の事が好きになるためのキツカケ作りである事は理解しているが、自分が興味を持った上で持ちうる全ての感覚を使つて堪能する事が命として向き合う最低限の礼節ではないかと考えている。満たされきつた飽食の時代だからこそ一つ一つの命と丁寧に向き合っていきたい。

もう一つだけ向きあつて欲しい問

題がある。食べた物で体は形成されているという事実だ。何をあたり前のことを言い出したのかと驚ろかれる事があるのだが、実感できているかは別の話だ。私は個人的に自分の体が嫌いな物ではなく好きな物で出来ていて欲しいと願っている。かく言う私も実感は出来ていないと思うが、訳の分からないような物で自分が存在しているという事が怖くて、奇妙なものは出来る限り避けている。

テレビが何かで見た映像が衝撃的で頭から離れない。忙しそうな男性が移動時間を使ってレトルトのカレーをストローを使って食事をしているシーンだった。私の目には食事をしていくためのエネルギーをチャージしている生命活動の維持のための行為にしか見えず、とても食事を楽しんでいるようには見えなかった。ここ100年ほどで、人間が楽しむための娯楽が一気に増えた。食事ははじめとする基本的な欲求が蔑ろにされつつあるのではないかと感じている。人それぞれが求める形がいくら増えようとも、基本的な欲求の質が高い生活を行える事に重きを置くだけで毎日の生活のクオリティが上がることは間違いない。

NHK WORLD JAPAN CORE KYOTO The Modern Flower

放映 10月10日 海外にて放送

※インターネットのオンデマンドでご覧いただけます。
(無料) QRコード↓



内容 京都の現代「花」事情

「華包」^{はなづみ} 芦田一春 大津智永 他
「花遊び」 桑原櫻子 桑原健一郎
「花結い」 花結い師タカヤ
「いけこみ」 花政 藤田修作 福山重文

※この内、桑原家の部分について紹介します。

桑原専慶流は300年以上の歴史があり、家元の家の各部屋には、普段から花がいけられている。花の世話は副家元の櫻子の役目だ。

櫻子「花は生き物なので、花がいけてないと寂しいんです。毎日水を換えて、少し足元を切り直して置いてあげると、又元気になるって咲いてくれる。その元気を私達家族も貰いながら毎日生活してるわけで、花が無い時というのは、ほとんどこの家ではあり得ないです。」

甥の健一郎は自分の世代で分かち合えるいけばなのスタイルを模索している。彼は生徒達にアートを楽しんでもほしいと願っている。

生徒さん「健一郎さんの教え方は、花を楽しむように語るんです」
生徒さん「敷居の高さを感じさせないよう先生がお声がけて下さるのが、この教室の特徴と魅力だと思っています」

健一郎「伝統を守るだけでも凄く意味のあることと思っています。けれども僕はお花が好きで、どんどんやっていく内にそれだけではなく、自分のお花というものを探し始めています」





若い未来のリーダーは教室に留まらず、ソーシャルメディアに作品を投稿している。

投稿作品の紹介

- ・多肉植物と地層と折り紙の恐竜たち
- ・桜の枝にとまる二羽の鳥のロマンス
- ・ガイコツとコウモリでハロウィンに

健一郎の新しい試みは伝統的ないけばなに、楽しい遊びの要素を加えること。

健「僕が3歳の頃から、祖母が出している本なんですけど、小さい写真集がございまして僕の原点でもあります。」

『ホッホチャンとケンチャン』の作品紹介

- ・子供用ブーツにバラ
- ・折り紙シュリケンとスイートピー
- ・てるてる坊主と柳とガーベラ
- ・ニッコリ手袋とアネモネと枝垂れ柳

祖母の素子さんが孫の健一郎と一緒におもちゃや人形を使った「花遊び」を写真に撮り、

祖父が文章を添えて本を出版。

『ホッホチャンとケンチャン』は彼が花に親しむきっかけとなった。

祖母に触発された彼は今、いけばなの喜びを広めようと懸命だ。

新しい作品を撮影する健一郎。

- ・切り絵の花火にホオズキと楓
- ・真夏の花火の思い出にいけばなを重ねる。

作品の前に、櫻子副家元と話す健一郎。若い華道家は時折受けるきびしい批評を糧

にして、新たな挑戦が続けている。

NHK WORLD JAPAN
Core Kyoto
"The Modern Flower"

Produced by NHK 2019
in association with
NHK PLANNET and in
cooperation with
J WORKS

立花時勢粧の器

「立花時勢粧」には118の図が収められているが、その器は96種類もある。出版された元禄元年頃には、華やかな世相と立花の流行とが相まって、立花瓶にも様々な形や新しい意匠をこらしたものが作られた。

自由奔放な自然の息吹とその調和を表現しようとした富春軒仙溪。特に行や草の立花には、それに呼応するような変化に富んだ器を選んで使っている。

器の形だけを見ても様々な形態のものがあるが、立花瓶の遊びの部分として「耳」に注目してみよう。

図① 蛸螂

図② 魚

図③ 象

図④ 鳥

図⑤ 兎

図⑥ 蝶

これらの意匠に釣り合う躍動感が花形にも求められることになるが、どんな花かは、それぞれの図で確かめていただきたい。



第六十六図 テキスト No.655



第七図 テキスト No.613・648 (に掲載)



第七十図 テキスト No.674



第二十五図 テキスト No.647



第八十七図 テキスト No.654



第五十七図 テキスト No.673

第52回 日本いけばな芸術展

会期 10月1日(火)～8日(火)

会場 東京日本橋高島屋

出品

4次展10月7日(月)～8日(火)

桑原仙溪 佐藤慶由

除真立花

花材

松(松科)
山帰来(猿捕次科)
蓮華躑躅(躑躅科)
満天星(躑躅科)
柊(柊科)

花器

貝塚伊吹(檜科)
寿松(松科)
鶏頭(寛科)
小菊(菊科)
銅立花瓶

盛花

花材

梅擬(繡の木科)
満天星(躑躅科)
糸菊(菊科)
杜鵑草(百合科)
羊歯(羊歯類)

花器

古染付水盤





山芍薬の実

やましやくやく

△10頁の花▽ 櫻子

花材 山芍薬（牡丹科）

糸菊（菊科）

蓼（蓼科）

花器 手付通草籠

ヤマシヤクヤクの学名は「ピオニア・ジャポニカ」でボタン科のボタン属。初夏の頃、透き通るような繊細な花を一輪だけ咲かせる。洋芍薬とは違い中々出会う事の出来ない貴重な花だ。器も取り合わせも特別なものを考えてあげないと綺麗に咲いてくれないような気がする。場所によつては絶滅危惧種にもなつていて、咲くのに6年もかかるので、育てている方は大変な事だ。その清楚な花からは想像も出来ないような派手な実。初秋には実が熟して結実しない赤色と結実した濃紺色の種子になる。

今年は入荷する数も少なく大切な一本となった。一輪菊とタデの花と籠花に。





雪柳と水仙

△11頁の花▽ 仙溪

花形 生花 株分け

花材 主株 雪柳（薔薇科）

子株 水仙（彼岸花科）

花器 陶水盤

秋の菊と冬の水仙。どちらも、多くの植物が葉を落とし、地上から姿をいったん消してしまう淋しい時期に花を咲かせてくれる。菊の季節、水仙の季節を心待ちにして、今年も楽しませてもらうことに感謝したい。

水仙の生花は一種でいて凛とした姿にするも良し、他の花や木と株分けにしてもいい。水仙は11月から2月初旬までいけられるので、取り合わせも色々楽しめる。雪柳の紅葉との対比が美しい。

レモンだより

お床を拝見中。

花…酸漿 アナベル 檜扇の実

額…版画 リンゴと少女（柳本史 ふうみ）





鎌柄の生花

△12頁の花▽ 健一郎

花材 鎌柄（薔薇科）

花器 煤竹竹筒

鎌柄は非常に堅く、鎌の柄に使われたことからカマツカと名付けられた。別名のウシゴロシは、この材で牛の鼻木を作ったためとする説などがある。生け花で用いるときは実と葉のバランスをとるのを気をつけると良い。どうしても実のつき方によっては、間の抜けた作品に仕上がってしまう反面、伸び伸びとした花に仕上げると独特の生花になった。熟した赤い実。まだ黄葉する前の葉。日照時間が短くなってきたなと実感する一つの要因でもある。紅葉の姿を見て、一緒に耐え抜いた暑さを懐かしむ。そして自分がクーラーのついた部屋に居たことをイカサマ呼ばわりされる。「あなたは夏を経てまっくろに日焼けしていないのね」と。これから始まる厳しい冬に備えてストーブの用意はもうしてある。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
11 月号
No.689

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





タカサゴユリの実

△2頁の花▽ 健一郎

花材 梅花躑躅(躑躅科)

高砂百合の実(百合科)

鶏頭2色(苺科)

花器 陶花瓶

高砂百合は種子を多くつけ、風に運ばれて広がっていく。高速道路で高知の牧野植物園へ行った際に、大勢で私を迎え入れてくれた。

花の季節が終わると実になり、意識しなければ見つける事ができないが、ふとした時に道端でも出会う事がある。

花を終えた実と、葉の役割を終えた梅花躑躅に、盛りの鶏頭がよく映る。



タカサゴユリの花

出典：<https://ユリ.net/ユリ-品種/タカサゴユリとは？.html>





シロシキブの実

△ 3 頁の花 V 桜子

花材 白実小紫

しろみのこむらさき

(熊葛科・紫蘇科)

杜鵑草 (百合科)

水引草 (蓼科)

花器 手付籠

小さな白い実が美しい。

シロシキブと呼んでいるが、シロミノコムラサキが正確な名前らしい。繊細な枝に沢山の実ができてい

る。白花のホトトギスを加えると、白い実と白い花が白さを競い合っているようにも、互いに助け合い讃え合っているようにも見える。

赤い花のミズヒキソウが優しく寄り添う。



シロミノコムラサキの花
出典：https://www.ootk.net/cgi/shikihtml/shiki_818.htm





ツルウメモドキの花

△4頁の花▽ 仙溪

花材 蔓梅擬 (錦木科)

糸菊 (菊科)

上臈杜鵑草 (百舌科)

花器 陶花瓶 (市川博一作)

いけた後でも刻々と変化する実ものの花材がある。ヒオウギやツルウメモドキの実は、しばらくすると弾けて中から艶やかな種子が顔を出すが、その自然の色のなんと美しいことか。

ツルウメモドキとジョウロウホトトギスの鮮やかな出会い。



ツルウメモドキの花。雌花⑥、と雄花⑦

出典： <https://plaza.rakuten.co.jp/okada1952/diary/201505120000/>





ローゼルの実

△5頁の花▽ 仙溪

花材 ローゼルあおい（葵科）

菊2種（菊科）

花器 陶花器

ローゼルは赤い大きな蕾つぼみに見えるが、中には既に実ができています。珍しく枝先に葉と小さな蕾が残っていたので、多めに買い求めて秋色の菊を合わせていけてみた。葉の水揚げも良いので、今後葉付きで出てるのを期待している。

今月号の実物花材には花の写真添えている。意外と知らない花の姿花を見てから実を見ると、実もの花材への愛着が増してくる。それぞれに個性的で貴重な実たちと出逢える楽しみ。秋のいけばなの醍醐味。



ローゼルの花

出典：<https://www.toukagen.com/?pid=126322305>





キミズミの実

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 黄実酸実の実 (薔薇科)
花器 陶花瓶

(2009年11月号より)

以前、ウラジロノキの実として白黒写真で掲載したもの。いけた後すこし橙色に色づいてきたと書いているが、ウラジロノキの実は赤く熟すので、もともと黄色く熟すキミズミだったかもしれない。確信はないが今回はキミズミとしておく。

キミズミはリンゴ属。ウラジロノキはアズキナシ属。似た実のできる木は他にも色々ある。



ウラジロノキの花

出典：<http://hanasan.dreamlog.jp/archives/52106298.html>



キミズミの花

出典：<http://www.okadanouen.com/zukan/kimizumi.html>



タマミズキの実

△7頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 玉水木の実(繻の木科)
花器 陶花瓶(清水保孝作)

(2012年11月号より)

タマミズキはウメモドキと同じモチノキ科の落葉樹で、静岡から南西諸島に分布する高木である。

ウメモドキより小さな実は、ややくすんだ赤色。

直立した幹から横枝が階段状に出て広がる樹形がミズキに似るがミズキの仲間ではない。

雌雄異株(雌木と雄木がある)なので両方の花の写真を載せておく。モチノキ科には雌雄異株の木が多いが、中には雌木だけでも結実するものもあるようだ。



タマミズキの花。雌花⑥、と雄花⑦。

出典：<https://matsue-hana.com/hana/tamamizuki.html>

出典：<https://www.digital-museum.hiroshima-u.ac.jp/~main/index.php/> タマミズキ



立花

△ 8 頁の花 ∇ 健一郎

花型 直真立花
すくしんりつか
花材 薄 (稻科)
すき

糸菊 (菊科)

吾亦紅 (薔薇科)

丸葉の木 (満作科)

山苧菜の実 (牡丹科)

杜鵑草 (百合科)

葉菊 (菊科)

竜胆 2 色 (竜胆科)

二輪菊 (菊科)

梅花躑躅 (躑躅科)

檜扇の実 (菖蒲科)

花器 陶花瓶

野の花の種類が一番多い恵まれて
いる時だった。この秋を立花にふん
だんに詰め込んだ。

枝物は丸葉の木と梅花躑躅のみで
あるが、草花に説得力が出ている。
翌日に薄の葉は巻いてしまった為
生け替えながら楽しんでる。

横から見た奥行き



石榴^{ざくろ}

〈表紙の花〉 櫻子

花材 石榴の実（^{みずはぎ}裸萩科）

菊（^{きく}菊科）
数字麻（^{じすうま}刺草科）

花器 陶花瓶

倉敷の叔母宅にてザクロの実を採らせていただいた。今年は沢山実がなつたので、持って帰っても良いとの事。お弟子さんに手伝ってもらい艶々^{えんえん}の真っ赤な実が付いた重たい枝を切り落とした。大切に持ち帰って、火花の様に咲くキク、花が密に咲くヤブマオと取り合わせた。思いがけない花にも出会えて、心に残る1作。



ザクロの蕾と花と花のあと



ザクロの花

出典：<https://mirusiru.jp/nature/flower/zakuro>



『溶ける』

健一郎

自分と人との境界が溶けてなくなっていく。私はこの世界の一部ではない。全てが渾然^{こんぜん}一体と化している。

桜とバードウォッチング。鳥の元気に振り回される。

水中を泳ぐ。自分と水の境界が曖昧。夏の砂浜。じりじり太陽を受ける。

苔でゴロゴロ。ここから動けない。岩にびったり。何故か落ち着く。

山頂にて瞑想。自分を無くしていく。雨でびしょびしょ。傘は置いてきた。空から落ちる。体が無くなったよう。雪中に溺れる。身体^{からだ}の熱をとられ私もひんやり。

花を生ける。花とおしゃべり。

頭を使って物を感じ取ろうとする行為は難しい。何も考えず、身体を放つぽり出す方が、想像を超える体験が可能である。

大自然はどう感じているか分からないが少なくとも私は相手と溶け込むことができる。感じている。

花と話しながら花を生けるのは楽しいが、感覚を研ぎ澄ましていくと花と一体になる事ができるのである。うか。それには大自然に溶ける練習がもう少し必要であると考えている。今の自然の一部である切り花に溶け込むようになるには、今感じている「溶ける」と言う感覚を研ぐ必要

がある。単純なもののほど自分を溶かし難い。頭でわかつてしまい、言葉に出来てしまうからだ。言葉を越えた雄大さを花から感じなければいけない。

私は自宅の庭を眺めることはできても、まだ、溶け込むことはできない。何かに夢中になった時、自分への意識が消え、自分でなくなる。

少しでも自分がのこっている、対象物の全てを感じられない。感じるとは、私を通して伝えられる感覚ではあるのだが、できるだけそのままのそれを私で感じていたい。自分を無くしただけ何かが入ってくる。

音楽に体をゆらす。不快と快の間を彷徨^{さまよ}うヴァイオリンの音、身体を解放すると、苦手な音が無くなっていく。心臓に直接響くバスドラム。バスドラムで心臓が動いているのかと感じる。

「閑^{しずか}さや 岩に染み入る 蟬^{せみ}の声」 芭蕉の有名な句である。蟬の声を聞き、蟬を見たわけでもなく、本人がそこにいるだけでもない。主題がぼかされているのである。閑さが主題なわけでもなく、岩も、蟬の声も主題ではない。その空

間を詠んだ句だと認識している。つまり、そこに自分は存在しているようである。自分が溶け込んだ状態と考えることもできるのかもしれない。

芭蕉は全国各地を歩き回り、その地、その地にて自分を溶かし歩いたのではないかと妄想も広がる。だが、芭蕉はスカイダイビングをもスキューバダイビングもしていなかっただろうし、日本から外には出ていなかっただろう。

私は今生きているこの時代を感じきたい。世界と私の輪郭線をボカしていったらなと考えている。



但馬で日帰りでのスカイダイビング

インドボダイジュ

学名：Ficus religiosa

英名：bodhi tree pippala tree

クワ科・イチジク属の高木。樹皮や根皮などを薬用とする。



信仰を集める樹齢 140 年のインドボダイジュ。ブッダガヤのマハボディ寺院。

出典：https://tricycle.org/magazine/bodhi-tree-tlc/



出典：https://china.desertcart.com/products/139063302-pmw-peepal-tree-fruit-powder-sacred-fig-raavi-100-goose-packed-loose-pa



出典：https://astrotalk.com/astrology-blog/why-is-peepal-tree-worshipped/



サンチー遺跡のレリーフ。紀元前 3 世紀にアショーカ王がブッダガヤに建てた寺院とボダイジュ。西暦 1 世紀。

出典：https://www.wikiwand.com/en/Bodhi_Tree

仏陀ゆかりの三聖樹

仙溪

インドの聖樹（聖木）にはどのような木があるのだろう。仏教とゆかりのある木について見てみよう。お釈迦様の生涯と深く関わりのある木は次の 3 つ。

菩提樹
サロノキ
ムユウジュ

釈迦は長い遍歴と苦行の末に、ウ

ルヴェーラ村（今のブッダガヤ）で一本のインドボダイジュの下に座し、49 日間瞑想して真の悟り「菩提」を得た。

太古よりインドボダイジュは大切な樹木であったようだ。インダス文明の遺跡から、その葉が描かれた陶器が見つかっている。葉、樹皮、根に様々な薬効があり、ヒンズーの主要な三神が棲む木でもある。

インドの国樹になっているくらい大切な木なのだ。クワ科イチヂク属の高木で、花は見る事ができず、枝に直接小さな

実ができる。ハート型の葉が風にパタパタと揺れる音がなんとも心地よいそうだが、釈迦もそんな音を聞きながら瞑想していたのだろう。

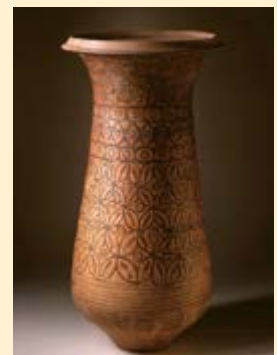
中国、日本でこの木は育たない。代わりにシナノキ科のボダイジュが寺院に植えられている。こちらは中国原産の落葉高木で、日本には栄西禅師が宋から種子を持ち帰った。

釈迦は 45 年の間、数百キロの道を何度も行き来して説法を続け、80 歳で亡くなる。終焉の地、クシナガラ



儀式で使用された陶器のハート型の葉模様。B.C.2600-2450。

出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/インダス文明#/media/ファイル:Ceremonial_Vessel_LACMA_AC1997.93.1.jpg





①と⑥④ 出典: <https://www.yamakei-online.com/yama-ya/detail.php?id=677>



涅槃。ガンダーラ、ロリヤン・タンガイ遺跡。2～3世紀。インド博物館（カルカッタ）。
出典: https://www.pinterest.jp/pin/389772542744921786/?nic_v2=1a2b00xf1

サラノキ

学名: *Shorea robusta*
英名: Sal tree
フタバガキ科・サラノキ属の高木。3月頃、葉の生え替わりと共に、淡いクリーム色の小さな5弁花が無数に咲く。花には芳香がある。



出典: <http://www.flowersofindia.net/catalog/slides/Sal.html>

釈迦が息を引き取ると、サラノキは時ならぬ花を満開に咲かせ、釈迦の体の上にその花を降り注いだという。サラノキはフタバガキ科の高木で、材は堅くて耐久性があり、様々に利用されている。落ち葉は草の茎で綴り合わせて丸い葉皿として使われる。

幹から採れる樹脂（ドゥーナ）は様々に利用され、燃やして出る良い匂いの煙は病原菌を殺して辺りを浄化するといわれている。そして春に咲く花にも芳香がある。釈迦がこの木の下を選んだのもなんとなくわかる気がする。

日本ではツバキ科のナツツバキやヒメシヤラが沙羅双樹として植えられている。

ムユウジュはインドでアショカと呼ばれるが、「ア（無い）」「シヨールカ（悲しみ）」から無憂樹の字が当てられた。釈迦の母マヤーがルンビニーの園でこの木をつかもうとしたときに、右脇から男の子（のちの釈迦）が生まれたとされる。



出典: <https://explorepharma.files.wordpress.com/2010/10/ashoka.jpg>



釈迦誕生。ガンダーラ、ロリヤン・タンガイ出土。2～3世紀。インド博物館。
出典: https://www.pinterest.cl/pin/AX0815eKMSm7yu8uWT-JzMV1xyS8-Mt049tKRfOXzzWLUXoRwCOLJs/?nic_v2=1a2b00xf1

ムユウジュ

学名: *Saraca asoca*
英名: Asoka tree, Sorrowless tree
マメ科・ムユウジュ属。細長い葉の常緑小高木。3月頃に美しいオレンジ色の花（萼）が咲く。



出典: <http://medicinplants.blogspot.com/2008/08/ashoka-tree-sorrowless-tree.html>

伝承によると誕生してすぐに七歩あゆみ、自ら偉大なることを獅子吼し、温冷二水によって身を清められた（灌水）とあり、その様子はのちに石に彫られ、仏伝のワンシーンとして今に伝わる。ムユウジュはマメ科の常緑小高木で、春の暖かさを象徴するような黄色から赤色の花を咲かせる。釈迦が世に現れる場所にふさわしい、優しい葉と温かな花色を備えている。



ヤマシャクヤクの実

健一郎

花型 生花

花材 ヤマシャクヤクの実（牡丹科）

花器 陶花器

一度見たら忘れることのできないインパクトを持つ山芍薬。山芍薬独特の赤と深い紺色が何とも愛らしい。

盛花や投げ入れで生ける事はあっても一種で生花にする事は珍しい。菊と株分けで生ける予定だったが、山芍薬のはちきれんばかりの個性を中和させることがもったいなく感じた。

不恰好で土味を感じさせる器に山芍薬の個性があっている。葉が綺麗な状態で残っていることは珍しく、真の葉はあえて一つも落とさずに生けた。留にもう少し葉があればと思うが自然に対して自分が何をできるわけでもなく、ありのままに生けた。



ヤマシャクヤクの花

出典：<https://akagishizenen.jp/blog/> ヤマシャクヤクが見ごろです！ /

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
11 月号
No. 701

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





立花時勢粧333年

記念插花 〓1〓5、12頁〓

会期 9月18日(土)〓20日(月)祝

会場 鹿王院

插花 桑原仙溪 桑原櫻子

桑原健一郎

シンクロするアート

鹿王院の座敷、日本画家・藤井隆也氏の枯葉の襖絵に囲まれて、藤井氏の屏風の前に花をいける。へんに緊張せず不思議なほど心地よかった。襖絵の枯葉が優しく花を見守ってくれているような感覚。藤井氏がつくる独自の世界にいけばなが呼応する。花とシンクロするアート。

舞う 鹿王院本玄関

〓表紙の花〓 仙溪

花材 グロリオサ(百合科)

鶏頭(苺科)

花器 陶花器 竹内眞三郎作

屏風 藤井隆也作

グロリオサも鶏頭も天竺(インド)ゆかりの植物なので、古刹にいけると何か意味ありげだ。グロリオサの蕾の形が屏風の絵と響き合う。緑陰の小径の先で、赤い花と黒い華が舞い踊る。



キラキラ 鹿王院客殿

△2頁の花▽ 櫻子

花材 鍾馗水仙(彼岸花科)

龍胆(龍胆科)

男郎花(女郎花科)

花器 陶水盤 近藤豊作

屏風 藤井隆也作

無数の光の輪のようなこの屏風の色に合わせて、黄色と赤紫の花をいけ、絵と一体となるように白い花を加えた。水面にも敷板にも屏風の絵が映っている。花がキラキラ光って見えた。

命を視る 鹿王院客殿

△3頁の花▽ 健一郎

花材 通草(通草科)

二輪菊 嵯峨菊(菊科)

桔梗2色(桔梗科)

花器 掛分釉花器 清水保孝作

屏風 藤井隆也作

この屏風を目にした時何故か細胞を意識してしまった。細胞まで見ることはできないが、花の細部までに気を使って花を生けることができたらなと思わされた。

5種それぞれの輝きが調和するようにいけた。



米母の立花

鹿王院草駄天像前

△4頁の花▽ 仙溪

花型 除真立花

花材 米母 (松科)

霧島躑躅 (躑躅科)
晒木

花器 遊環耳銅立花瓶

後ろに居られる草駄天様は俊足で僧坊の守護をされている。遙か遠くの深山の樹を立て、供養させていただいた。

深山砂物 鹿王院茶室

△5頁の花▽ 仙溪

花型 砂の物

花材 錦木 (錦木科)

天南星 (里芋科)

甘野老 (百合科)

笹竜胆 (竜胆科)

藤袴 (菊科)

白花村鵝草 (百合科)

下野 (薔薇科)

紅羊齒 (雄羊齒科)

花器 銅砂鉢

掛物 藤井隆也作

普段非公開の大河内傳次郎寄進の茶室。珍しい実や一足早い紅葉を床の間に。もてなしの花。



㊦ 緑陰の小径の奥で出迎える屏風絵といけばな
 ㊧ 昨秋奉納された木の葉の襖絵（56面）の1つ

THE KYOTO
 襖絵に走る葉脈
 古刹・鹿王院
 現代美術作家の創造
 会員制の文化情報発信サイトに、藤井隆也氏の襖絵への思いが紹介されています。是非ご覧ください。↓



行李柳

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 行李柳(柳科)

花器 煤竹竹筒

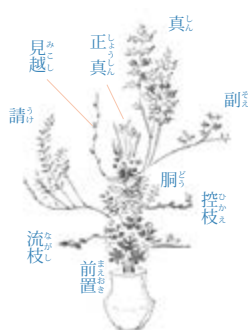
行李柳の生花は櫛くしでといったようにというのが理想だが、途中で枝分かれしたものを混ぜながらその姿を生かすなら、多少の枝の交差には目をつむり枝が持っている勢いを表現したい。



晩秋の立花

△7頁の花▽ 仙溪

花型 除真立花
花材 柊(木犀科)



昨年の晩秋に稽古で立てた立花。テキスト1月号掲載の立花と同じ花材なので見比べてほしい。お手本として立てたもの(今回)と自由に模索しながら立てたもの(1月号)。どちらが優れているのかではなくて、立花を立てる時の姿勢としては、1月号のような自由な心でいたい。

花器 陶花器

小菊(菊科)

寒菊(菊科)

赤芽柳(柳科)

椿(椿科)

鳥不止(目木科)

水仙(彼岸花科)

雪柳(薔薇科)

文阿弥花伝書

仙溪

縁あつて鹿王院で花をいけさせて頂けたので、鹿王院に伝わる『文阿弥花伝書』のことに触れておきたい。

この花伝書（3巻の巻物でおそらく後世に書き写されたもの）は供花の功德や挿法・飾り方について仮名交じり文で書かれ、所々に彩色の絵図があり、各巻末尾に綉谷庵文阿弥の名がある。

序文に、仏前の供物の中で花を最も尊いものと位置づけ、花を嗜むことで現世で楽しみ来世で救われることができると説いている。

花伝書としては最初期の内容と思われるのだが、詳しい研究がされていないのが残念。ここに序文全文を紹介する。

『大和文華 第48号』掲載の釈文（読みやすく直した文）を参考にしたが、段落で区切り、仮名を漢字にするなど

した。間違いがあればご指摘願いたい。

序曰

夫れ、この界は須弥の南瞻部州、天竺大唐日本三国之に同じ、其の中に於いて我が朝万勝たり。

先ず神国なるがゆえに仏法に近し。諸宗の元祖三国に渡るに、諸経論秘伝尤もこの国に収まるなり。されば日域に生ずる人、知恵のかしこき事万鏡を磨き、心のゆるき事四海に満つ。

しかりといえども、その身の嗜み学する事は身軀に影の応ずるがごとく、心闇々たれば影うつる事なし。玉磨かざれば光なきがごとし。たまたま請けがたき人生を請け、生まれ難き国に生ずる事有り難き宿因と思ひ、一弾指の間もいたづらに日を送る事なかれ。ここ



文阿弥花伝書と伝わるものは滋賀の西教寺に7巻、九州国立博物館に残巻1巻、他にもあり、鹿王院のものには天承元年（1131）の日付がある。

『特別展 いけばな 歴史を彩る日本の美』図録より（2009）p42-43



鹿王院山門からの長い石畳。苔生した紅葉の林を真っ直ぐな道が続く。清浄な空気に癒やされる。

をわきまえざる人はなげかしきや。三界六道に輪廻し惡道に墮せしめん基なるべし。今生後生のために諸芸を嗜むべし。

しこうして仏神三宝に六種の供物あり。その中にとりわき花供尤も勝りたり。又翫ぶ事私ならず、この道に深くわけ入り、深真不思議の信号を六ちにそみ（六陳に染み）、教えの如くに翫ぶならば、仏道修行にもここ無二無三の教行にあらずや。

先ず身色この理をもつてとるに、地水火風空の五軀なり。青黄赤白黒色これに顕れ法報応の三身もこれあり。五音に五の響きまでも顕れたり。そのゆえは五軀六色具足しぬれば、すなわち三身万徳の悟りあり。これを識る事は易かるべきかな。又難かるべきかな。ただすべからく師の伝来をもつて教え

とす。

心に得たるところをもつて悟りと定むべしや。心を千またにわかち、勢を天地に馳せてこの道を心えべき事肝要なり。たとえは万木千草ごとくもつて四季折々の風情をたもつ事、釈尊の深入禅定觀見法界、草木国土悉皆成仏と法華經に説きまします事も、釈尊一念の上なるべし。森羅万象有情非情の上をなべて草木国土と名をさしてのべ給うと見えたり。何事が疎かならむや。

松杉をしん（西教寺に伝わる文阿弥花伝書には「身」の字が使われている）に用うは真如実相の心と得べし。開落の花は随縁真如の道理と心得べし。又四季に変ぜざる草をば不変随縁とも真如平等とも観すべし。花を翫ぶ事は仏世にたとえは釈尊一代教法には華嚴經の説と心得べし。もつとも莊嚴第一の

利益なり。花を挿げる室には諸天来迎あり、天人も影向したまうなり。

春は諸花の開落の枝をまじえ、匂ふんふんとして袖にうつる事は、梅檀の林に入りてさながら梅檀を翫ぶにことならず。峨々たる枯れ木のこずえは鉾を立てたるがごとし。苔のひまよりみどり少々わひ出、若木をそねむに似たり。沙羅双樹のかり（殯？）に色を変ぜしがごとく。

夏はかきつばた花あやめなど水辺に咲ける趣で、すなわち涼しき事これに思うに江南の野水に戯れるがごとし。

秋は千種の花の朝露にかたぶき、己々の色をうつし、又夕時雨一通りのあとうち湿り、しどろに伏し違うを見るに、などか心を掛けざらん。

冬は山野悉くおしなべて霜雪に草木うづもれ、儂き思いにも堪えぬべきところに、傍らを見れば一もと菊の散り残り、虫の住みかの名残かと哀れなり。

又山橘、深山橘などいうものの実に色をなし、葉に水をふくみ青々明々とする事をみれば、また枯れ果てぬ世の有様と頼みあり。

めづらかに面白き事、いかなる慳貪放逸の人かこれをそねまんや。四季折々の無常を知つて、有為の転変を悟らざらんや。生老病死の理をしるべきも、尤もこの一瓶のうちに漏れんや。

道俗男女在家出家貴賤上下ともにこの花を翫びなば、当来にては心を慰み客をもてなし、来世にては仏の会場に往詣して、種々の曼荼羅に座し、種々の花を翫ぶ事疑いあるべからず。

挿げる道より悟りを開かん事決定なるべし。委才覚のおもむき、この一巻のすえに顕了す。ただ古今の師伝にまかせ、かくの如くなるべし。六賢他見あるべからず。これを秘すべし。

又曰く、花を立つ事、仏在世より今に至るまで戒定恵の三字をしめし給うその第一なり。香花火をもつて三字を示し給うと見えたり。

（このあと巻1に72、巻2に67、巻3に9の事柄が書かれている。）

仏教と花の関係

文阿弥花伝書の序文を読んでいて、「仏教」と「花」の関わりについて新鮮な発見をした。

文阿弥は「万木千草ごとくもつて四季折々の風情をたもつ」この世界

で、季節の移ろいを感じながら花を挿す行為そのものが「悟り」に繋がる崇高な「嗜み」だと力説している。

仏教の供花がいけばなの源流の1つと分かつてはいたが、それは形式だけではなくて花を挿す精神も育んでいたのだ。

仏教僧が釈迦の教えに近付こうと花を挿すうち、花も人と同じなのだと思ひ付きそれこそ釈迦の教えと悟る。花を慈しみその個性を生かすように挿した供花が自分も含めた人々の心を癒やす。そして何より花を挿すことでより良く生きるための道がひらける。日本に生まれてこんなに素晴らしいことをやらないなんてもったいない、と文阿弥は熱く語っている。

花を尊ぶ気持ちが良いいけばなを生むのだと最近つくづく思うようになったが、彼は同じことを書き伝えてくれている。



足利義満筆「鹿王院」の額と客殿。
襖絵の枯葉、屏風絵、花。それぞれが響き
合い呼吸する。



鹿王院の舍利殿（現在修復中）。
中に源実朝が宋から招来した仏牙舍利（釈
尊の歯）を安置する多宝塔がある。

『酒沢カール』からさわ

健一郎

ナナカマドの赤色、ダケカンバの黄色、ハイマツの緑に覆われた300メートル級の山々に囲まれた窪みへ菜月と2人で行ってきた。その場所は酒沢カールと呼ばれており、積雪が大きな氷になり重力によって流動して削られてできたくぼみだ。紅葉を見に出かけた。10月上旬であった。

酒沢カールまで長野県の上高

地から片道を徒歩で6時間ほどで着くらしいのだが、8時間ほどかかった。道は険しい。奥上高地とも呼ばれている。

出発してすぐの上高地付近では微かに残る夏に目がいく。標高が上がるにつれ、草木の様子が変わっていく。歩が進むたびに季節が少しずつ変わっていく。それは山を歩く楽しみでもある。

北アルプスの空気を心ゆくまで吸った。山芍薬を甘くしたような匂い、湿った土の匂い、動

物の匂い、樹木が発するフィトンチッドの匂い。場所や標高が変わることでもさまざまな香りを楽しんだ。中でも高い標高で森全部の匂いが内包されたかのようない匂いはもう一度嗅ぎたいな、と下山した今も思う。山自身匂いののだろうか。良かった。

植物のない岩をゆつくりと歩いて山小屋により、ソフトクリム。岩の道を歩きながら木陰に座り羊羹。そして酒沢カールの小屋でビールとおでん。格

別だった。

小屋で一泊した。本格的な山登りは初めてだ。夜は寒く、いくら着込んでも寒い。外へ出ると雲で星は見えなかったが、テント泊している方達のテントが綺麗だった。することも無いので、早めに寝て起きると、日の出の時間だ。酒沢カールでの日の出は直接、日光に当たることには叶わない。酒沢カール名物、モルゲンロートを見ることができた。モルゲンロートとは、東から太陽の赤い光が山筋を照ら

し、山脈や雲が赤く染まる朝焼けのことを指し、山がもともと美しく見える現象の一つとされている。太陽で照らされた山を背に下山をする。危なっかしうはあったが、ペースを上げ6時間で麓まで戻れた。急な道中文句を言いながらついてきてくれた菜月には感謝している。1人でなく菜月と帰ってこれたことに大きな意味があるように思う。食べ物が血肉を作るように、見たもの感じたものが感性を作る。2人で色々なものを見て歩きたい。





⑥



⑨



⑦



⑧



⑩

①湊沢カール付近のゴヨウマツ。這ように枝を伸ばしていた。 ②徳沢付近で猿をよく見かけた。キノコをとって食べて日向の程よい倒木の上に腰掛け食べていた猿が印象深い。 ③オヤマボクチ。 ④ノギク。道中に時折花が残っている。 ⑤フジバカマ。 ⑥横倒しに伸びるナナカマド。 ⑦マユミの実。 ⑧上高地、河童橋と星空と。 ⑨新月の夜空に満天の星。 ⑩日の出の瞬間、山が赤く染まる。モルゲンロートと呼ばれる神秘的な光景。



花一輪

鹿王院客殿

△12頁の花▽ 仙溪

花材 蓮（睡蓮科）

笹竜胆（竜胆科）

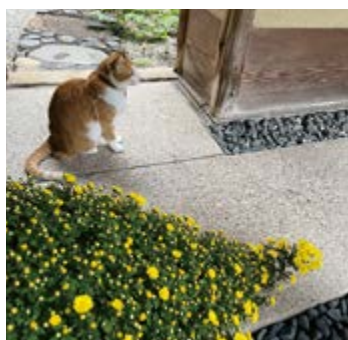
花器 黒釉鉢（竹内眞三郎作）

あまり禅問答のような花をいけようとは思わないが、一輪の花を大切に作る気持ちは持っていた。手にした花のどんな表情を見せたいのかによって、器を考え、取り合わせを工夫し、いける本数を決めるようにしている。

この屏風絵は表紙の屏風の裏側で、ここにはハスをと決めていた。枯れ行くハスの葉を一輪のリンドウが優しく見ている。

小菊とレモンちゃん

菊薫る季節 10/12撮影



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
11 月号
No. 713

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



今年も届いた烏瓜

△表紙の花▽ 櫻子

花材 烏瓜の実（瓜科）

白花杜鵑草（百合科）

蓼（蓼科）

花器 煤竹手付籠

5年前からカラスウリをテキストに載せている。お弟子さんが庭で採ったものだ。過去に3作仙溪がいて、今回は健一郎と私がいた。それぞれに違う味がある。

私は赤と白の野草を合わせて籠花にした。煤竹の温かみのある色が良く似合っている。



烏瓜の花
7月撮影



秋草と色づく葉

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 更科升麻（金鳳花科）

丁字草（夾竹桃科）

木苺（薔薇科）

花器 陶水盤





サラシナシヨウマの自然な曲
がりを生かして生花にいたけた。
2種の葉色がいい景色になつて
くれた。



実の色を集める

△3頁の花▽ 仙溪

花材 蔓梅擬(錦木科)

菊(菊科)

白花藤袴(菊科)

花器 陶水盤

ツルウメモドキの勢いを楽し
んでいけた。前方に実を集め、
緑の濃淡で実の色を際立たせ
た。





オレンジ色

△4頁の花▽ 桜子

花材 野茨の実（薔薇科）

マリーゴールド（菊科）

木苺（薔薇科）

花器 小紋陶花瓶

橙色の濃淡は様々な色名で呼ばれてきた。蜜柑色、萱草色、山吹色、支子色、深支子、柑子色、柿色、照柿、鬱金色、樺色（蒲色）、赤朽葉、淡香、朱色、鮎色、赤橙、蘇比、丹色、鉛丹色、黄丹、金糸、鶏冠石、雄黄、琥珀色、珊瑚色、朱華、東雲色、曙色、赤朽葉という色名も素敵だ。自然の中や生活の中で目にする

色の微妙な違いを、そのもの名前前で呼んで区別したのだろう。どんなものが印象深く目に映ったかを逆に想像できて面白い。この花の色はマリーゴールド色と呼ぶことにしよう。

13〜15日 鴨島文化サロン作品展

3年ぶり 待望の再開

民間発表の場 県内草分け
ジャンル多彩、ユニークな展示



1月4日、5日、6日の3日間、鴨島町の文化サロンで、3年ぶりに開催される「鴨島文化サロン作品展」が、鴨島町の文化サロンで開催される。この作品展は、鴨島町の文化サロンの草分けとして、県内草分けのジャンル多彩、ユニークな展示が行われる。この作品展は、鴨島町の文化サロンの草分けとして、県内草分けのジャンル多彩、ユニークな展示が行われる。

展示しているのは、鴨島町の文化サロンの草分けとして、県内草分けのジャンル多彩、ユニークな展示が行われる。この作品展は、鴨島町の文化サロンの草分けとして、県内草分けのジャンル多彩、ユニークな展示が行われる。



徳島だより

毎年お盆の頃、華老の武田慶園先生とお弟子さん達は地域の文化サロン展に大作花をいけ続けておられ、今年で47回目となる。サロンを主宰する藤原茂喜さんは「文化力を高めるには作家が集い発表できる環境が重要」と。貴重な集いの場だ。

空色の器に

△5頁の花▽ 仙溪

花材 山茱萸の実（水木科）

岡虎の尾（桜草科）

金水引（薔薇科）

花器 陶花器（木村盛伸作）

水が冷たく感じる季節。実が色づき、葉が秋色に染まってく。小さないけばなでいいので、移ろう季節の輝きを部屋にいて眺めていたい。



檀^{まゆみ}と菊の盛花

△6頁の花▽ 健一郎

花材 檀^{にしきぎ}（錦木科）

菊4種（菊科）

竜胆^{りんどう}（竜胆科）

花器 陶水盤

菊ほど盛花が適しているお花があるだろうか。盛花だと菊の良いところを余す事なく味わうことができる。

糸菊のサラリとした葉も綺麗だが、一輪菊のようなハリと厚みのある葉も好きだ。盛花だと一輪菊の品を醸す葉が美しく見せられる。

立派な檀の葉の隙間から実が顔を覗かせる。



冬芽を楽しむ

△7頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二種挿し

花材 水木（水木科）

菊（菊科）





花器 白竹竹筒

葉と花を落とした枝に花芽が付いている状態。冷たい色のバック紙を使用し、自分の感じている雰囲気になんかは近いものを表すことができたと思っている。お花屋さんでは「まつ毛」と呼ばれていた菊。根締めになっていると安心する。



レモンの顔がキズだらけ…。夜中に野良猫と戦って、メイちゃんを守ってくれていたのかな。



桑原健一郎 立花
アララギ 梅擬 檜 ひのき
躑躅 つつじ
・ 銅立花瓶



家元の「やってみなはれ」の

一言から端を発し、今年3月の
 流展からの弾みもあり、社中展
 が気がついたら終わっていた。
 あつという間の3日間だった。

花と人が心地よさそうに過ごすこの空間は特別なものだった。自分が日頃から考えている事が姿として現れたようだった。鹿

王院の場、藤井隆也氏の屏風、襖絵、お花、お弟子さん、見てくださる方が生き生きとした空間を目指し拵えた。当日の生け込みは自分のお花を立て終える

とお弟子さんの構想を聞き、安心して任す。することがなくなつた僕はお庭を見てコーヒーを飲んでゐた。皆の途中経過を見て回るのは楽しかった。普段の稽

古と違う点は特別なお花と特別

な場所であること。皆、それぞれ空間の中にあるお花を見つめていたのが印象的だった。多少の課題は見つかったが、概ね満足している。「みんなそれぞれの個性を生かし力を合わせて手作りする感じがとても好きです。」とお弟子さんからあったひとこととは僕のお気に入りである。

この花会が成り立つにあたり、それぞれの方が目を輝かせ、尽力下さった。その場の物から人まで在ることに不思議な気持ちで一杯だ。

ありがとうございました。

特設サイト
↓



華道桑原真慶流

右京で次期家元 初いけばな展

華道桑原専慶流（京都市中京区）の次期家

元桑原健一郎さん(25)
の初めてのいけばな展
が23、25日、京都市右

る。指導する門人らとともに、「花の思歌」をテーマに約20点を出品する。

次次を担うため、職からいけばなに親しみの「生」を引き出すことを模索してきた。

在学中の5年前から教習活動も始め、花のあふむ暮らしの楽しみを伝えていく。

23日は公開生け込みで、花を生ける姿も披露する。いけばな展は無料だが、鹿王院の拝観料が必要。

生き生きとした花の姿を求めて、いけばなに向き合う桑原さん

(京都市中京区・桑原専慶流全元)

A man in a white shirt and tie is kneeling on a tatami mat, tending to a large potted plant. The plant has green leaves and yellow flowers. The room has traditional Japanese sliding doors (shoji) in the background.

手道家のいけばな展覧などに出品してきたが、自身が主宰するものは今回が初めて。同流に伝わる伝統的な立花や生花、現代的な盛花などで、それぞれの植物の「らしさ」を表す。

藤原さんは「お花が気持ちよさそうに生き生きとしている姿を見てきたときに、温かみを感じてもらえる作品を仕上げたい」と話している。



蓮の枯葉 蓮台 ^{ひめがま} 姫蒲 ^{しらん} 紫蘭 ・
陶水盤



^{おみなえし} 女郎花 ^{しゅうかいどう} 水引草 ^{いぬたで} 秋海棠 犬蓼
^{ほととぎす} 白花杜鵑草 他 ・ 手付竹籠



黄糸菊 赤紫菊 赤小菊 白小菊
白万寿小菊 ・ 陶水盤



生花 ^{まき} 朝鮮槭 ・ 銅薄端



生花 ^{やまにしきぎ} 山錦木 ・ 陶鉢



^{まゆみ} 檀 (黄葉と実) 黄菊 白菊 ・
陶水盤



立花 ^{なつはげ} 夏櫨 (紅葉) ^{ななかまど} 七竈 ^{まゆみ} 檀 ^{つつじ} 躑躅 ^{りんどう} 黄糸菊 竜胆
^{しやれぼく} 晒木 ・ 銅花瓶



立花 ^{つるうめもどき} 蔓梅擬 ^{むいらぎ} 柊 (緑葉と黄葉) ^{りんどう} 竜胆 ^{ふじばかま} 藤袴
白花藤袴 ・ 銅花瓶



西洋鎌柄（黒い実） 躑躅 杜鵑草
・ 陶花瓶



梅花躑躅 石榴（実） 山芍薬（実）
・ 陶花瓶



薄 小葉の莢迷（赤い実）
白花野菊 ・ 陶水盤



檜扇（花と実） 白花藤 袴 桔梗
・ 陶水盤



野茨（赤い実） 雪柳 赤薔薇
・ 陶花瓶



檜 竜胆 藤袴 ・ 陶水盤



立花 鶏頭2種 紐鶏頭 鼠 薔
龜甲榿木 黄金檜葉 竹蓍莪
銅広口花瓶



生花 数山査子 ・ 白竹竹筒



夏櫨（紅葉） 秋明菊 赤小菊
・ 陶花瓶

直心立之内草之花秋

花伝書を見る

立花 りつか けいとうすくしん 鶏頭直真 すくしんぞく

直心立の内草の花形

桑原正栄

(富春軒仙溪・初版)

鶏頭 柳 梅擬 菊

擬宝珠 檉木 檜扇

躑躅 伊吹

(立花時勢粧・上)

うに目のある所に目あり、鼻

ある所に鼻があるように」と

の古人の言葉を引用している。

型の中でどれだ

け草木の個性を引

き出せるかが問わ

れる花形である。

松以外を真(心)にした直
真立花は「直真立・草の花形」
になる。「直真立草の花形とい
うは心に梅、海棠、梅擬、水木、
檜、鶏頭などの直なるを用い
る」と書かれている。

直真立ては法度を守り格式
に背かず、草木きれいに素直
なものを丈高く幽玄にさすこ
とを本意とする。「人の顔のよ



同



烏瓜からすうり

△12頁の花▽ 健一郎

花材 烏瓜の実（瓜科）

きんぎょのうせんからすら
楸（凌霄花科）

花器 陶花瓶

山に向かう道中や、あまりにも立派な烏瓜だと車を途中で止め見に行く。葉は乾燥に弱く、すぐに枯れてしまう。

私自身、花を生けるときに園芸化された花も好きだが、できるだけまだ山の香りが残っている植物を相手にしている方が合っている気がする。その際に強い高揚感や植物と共にある感覚を強く感じる。自分でも不思議な気がしている。

家元稽古のお弟子さんから頂いたものを分けてもらった。絡まりやすいはずの葉や蔓がとても綺麗にとられ、丁寧に包まれている。烏瓜も驚きだろう。もう一度絡めさすという奇妙な体験をすることができた。お花を生けることの妙な感覚が久しく思い起こされた。お気に入りの楸に絡めさせると、烏瓜を生かすことができた。先まで綺麗に包まれていた葉を味わいきった。花を生けることはその花を深く味わうことである。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023 年
11 月号
No. 725

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





香りの樹 櫻子

メラレウカ（フトモモ科）

薔薇の実（薔薇科）

糸菊（菊科）

陶花瓶（市川博一作）

オーストラリアの常緑樹、メラレウカは葉に爽やかな香りがありエッセンシャルオイルが採れるものもある。三重県のタナカ園芸では数十種を育て、日本でも育つ16種のメラレウカを販売している。今後は公園や家庭の庭でも馴染みになるかも。

黄金色の枝をオレンジ色の背景にいたらライムグリーンに変身した不思議な樹。爽やかな黄緑色は秋のキクとも相性がいい。黄色の他に赤く色付く品種もある。葉付のバラの実が季節感を深めてくれる。



タナカ園芸のホームページより

- ①レボリューションゴールド ②オータムファイヤー
③メディカルティーツリー ④タイムハニーマール



高砂百合の実 たかさごゆり 櫻子

丸葉の木 (満作科) まんぞく

糸菊 (菊科)

高砂百合の実 (百合科)

陶花瓶

この長細い緑の実がタカサゴユリの実。細長い茎と細長い葉が見分けるポイント。一本に沢山の花が咲くので数個の実ができるが、おそろく産地で実の数を減らして育てているのだろう。軽やかな姿は秋の花と合わせやすい。台湾原産で「タカサゴ」は台湾の昔の呼び名だそう

だ。マルバノキは岐阜県、高知県、広島県に隔離分布する、氷河期残存種で日本固有の植物。マンサクに似た姿の赤い小花が秋に咲くのでベニマンサクの別名がある。丸い葉の色付きが目を楽しませてくれる。

器の飴色の釉薬がマルバノキの葉によく似合う。ピンクの菊が優しく重なる。





稽古の花 ①

10月3日撮影 仙溪

ばいかつし
梅花躑躅（躑躅科）
菊2種（菊科）

陶水盤

近年花の値段が上がっている。税抜き1300円で稽古花の参考にいけてみた。

但し地域によって花の値段は変わる。同じ地域でも花屋によっても違いがある。品揃えや品質が良い花屋では単価は高くなるかわりに、良いとり合わせが期待できる。

写真の花は秋の菊が出始める前に品薄で菊の値段が高騰していた頃、菊2本とバイカツジは一本の半分量だが、季節を味わうには充分だ。ツツジの艶のある葉の色づきと、丸花スプレーギクの臘脂色えんじが秋を感じさせてくれる。良い状態の菊の葉はすべて大切にいけている。





椿の実

仙溪

椿（椿科）

陶花瓶

ツバキの捻^{ひね}た枝に実がついて
売られていたので生花にしてみ
た。なんとか形にはなったとい
うところか。艶やかな丸い実は
数日後に弾けて種が落ちてい
た。爆^はぜた実も趣^{おもむき}がありい
ものだが、もう葉に力が無く
なっていたので飾っておくのを
断念した。生花にせず投入でい
けていたらもつと保ったかもし
れない。

この先、寒さに当たって実
に赤みがさす頃に、風情を生か
してまたいけてみたい。





蓮一色砂物 健一郎

蓮（睡蓮科）あし 葦（稻科）

姫岩菖蒲（百合科）

小菊（菊科）

銅砂鉢

今年も、藤井隆也さんの屏風と共に鹿王院さんにて、社中展をする事ができた。お花の気持ちよさそうな空間を作る事を心がけての展覧会で、花の様子を見ている限り成功したのではないかと思っている。

写真の花は、今年の夏に立てた立花の蓮の葉を乾かし、茎も取っておいた。虚実絢交ぜの景色。それぞれがそれぞれに反応している。あしらいの葦が蓮をより引き立てている。枯れても綺麗だったが、やはり、緑が綺麗な方が良い。場にあつたい花が立てられた。次は葉がもう少し太陽に当たって茶色くなった葉で生けてみたか思っている。

正真のヒメイシウブが可愛らしく全体に勢いをつけている。枯れものを生けるときには、雌株の小菊など、生きたお花がより綺麗に見え、枯れものも生きる。枯れものだけでは、枯れものの良さは伝わらないと思っている。



松一色立花 健一郎

松（松科）

晒木

陶花瓶（宮下善爾作）

藤井隆也さんの松を生けるために作られた屏風の前に松一色の立花を立てた。今回お花屋さんを用意してもらったのは、北陸地方のなんとも上品でつややかな葉で自由な枝ぶりの松。その辺に生えていても見過ごしてしまいそうなものだが、花フジさん、流石の審美眼である。自分もこうありたいと思ってしまふような松だった。

今までの松一色とは比べ物にならない難しさで、形にするのに悩んだ。今まで色々な松に触れてきた。生けたと言う意味ではなく、どこに行っても松があれば触れてみたくなるのだがこのような松には出会ったことがない。会期中を通して毎日枝を足したり引いたりして楽しんだが、まだしつくりときていない。生けると最後は納得することが大半なのだが、なかなか難しいものである。

花伝書を見る

松一色 (行・初版)

富春軒

松 苔 松毬

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

山深く人跡未踏の仙境を行
者の如くに分け入ってはじめて
出逢えるような景色とでも
言えがいいのだろうか。岩の
隙間に根を張って風雨に堪え
る松の姿。どれも並の松では
ない。様々な個性が混沌とし

つつ調和する凄さ。銅器の龍
が今にも松樹の間を縫って天
に昇ってゆきそうな気配がこ
の松一色にはある。



この図だけ「富春軒」の名
前が草書体になっているのは
何故だろう。

富春軒が問いかけてくる。
「君は自然と一体になれたか
い？」

富春軒



彼岸の頃、奈良の葛城山にススキを見に行った。東に大和盆地、西に大阪平野が見渡せる山頂はススキの原。白い穂が風に舞い輝く。帰路は黄金色の稲穂と真っ赤な彼岸花を見ながら御所駅まで歩いた。大和朝廷ゆかりの地を訪れた印象をいけた。

彼岸の記憶

△表紙の花▽ 仙溪

彼岸花 (彼岸花科)

薄 (稲科)

プロテア・コルダータ

(ヤマモガシ科)

飴色釉陶花器



葛城山麓から大和盆地に広がる田園。



ロープウェイで葛城山山頂へ。春はツツジの花、冬は雪景色が楽しめる。



第56回

日本いけばな芸術展

東京日本橋高島屋

第2次展 9月29日(金)～30日(土)



中国旅行記

健一郎

今までの旅は、頭から言葉がたくさん湧いて出てきた。帰りのフライトで言葉が溢れてそれを文字に懸命に起こしていたのをよく覚えていて。時には旅の途中で言葉が溢れ、文字に起こしていた。言葉が頭に浮かんで消える。あるうちに形として残したくなる。今では妻も慣れたようだが、入浴中に頭を泡まみれにして、腰にタオルだけ巻いて消えてなくなりそうな言葉を控えることはいまでもよくある。

今回の中国の安徽省（あんき）浙江省（せつしょう）の旅では、頭に言葉が残らなかった。その代わり、身体にはまだ感覚が残るという変わった旅だった。

アヒルや、カエル、鳥の足の食感、そして舌に残る山椒のピリピリや喉の奥を突くような唐辛子。柄に柄を合わせるような感覚で、臭みのあったであろう肉も食事になっっているのには驚いた。普段慣れない野菜も、含めてどれも美味しくいただいた。日本には無いものの生かし方が新鮮で面白かった。パイナップルに、蜂蜜梅干しを少し挟んであつ

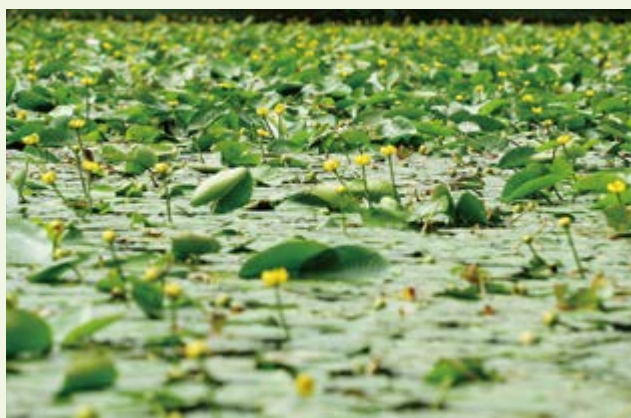
たのは一つの例である。

仙境を彷彿とさせる黄山に登った日、山頂で夜中に冷たい石の上に座り、寝転がり、目を瞑り呼吸をしていると身体が山の空気と交わっている気がした。その後、景色を見ながらインスタントのラーメンを食べながら雲が去るのを待っていると、1時間ほどだけが星が望めた。いい夜だった。

日の出前、深い霧が動き、松の露が滴る音の中、たくさんの人が日の出を一目見ようと待っていた。僕達は山頂のホテルに泊まったが、一晚、山頂付近で朝の陽を待つ人が大勢いた。日の出の1時間前から待っていたのだが、ダウンを着ていても寒さが身体に伝わる。皆よく一晚を越したものだと言わされた。

日の出を待ち望む人々の声。曇り方が強く、見えないであろうと諦めかけていた時にほんの10分ほど薄雲になり、日の出を見る事ができた。外で一晚を越しても見る価値のある10分だったなと思えた。早朝の鳥の鳴き声を聞きながらの下山は気持ち良かった。山法師の実を食べるリスも鮮明に覚えている。

富春山の麓では金木屋の香りが場を包み込んで





いた。竹の葉が揺れる音を感じながら、様々な樹木、草花と川のせせらぎが迎えてくれる。その奥に虫の音が聞こえる。湿度も高く、豊かな場所です。決して特別な樹木昆虫は見かけなかったが、関係性の中で全ての生き物が生き生きとしているように見えた。個人的にはオトコエシが蜘蛛の巣に巻き込まれ、一本だけ上を向いている姿が印象的だった。

前日に夕食でお世話になった山の中のお店で、木を数本頂いてお花を生ける時間は特別なものだった。忘れられない富春山での思い出である。こんなに贅沢な経験はできないだろう。本当に気持ち良かった。富春江で触れた柳の揺れる音と、木々の感触、釣りをしている人をちらほらと見かけた。景色があたりたかく身にしみる。今もまだよく釣れるらしい。魚を釣るところを見せてくれた。西湖では、柳の葉と人の声が共にあるのが心地良かった。

香り、食感、触れたものの感触、木や、虫の声の余韻がまだ残っている。

考えずに中国で在れたのは間違い無く、かよ（龍嘉代）さんのおかげだ。浙江省は地元で、富春

山で幼少期はスイカを食べたり、水を汲んで飲む事、蛇の話を楽しそうにしてくれた。中国に関心を持つてくれる事が嬉しいのだと言う。

そして僕の趣味趣向に合わせて旅のドライヴとエスコートをしてくれた。登山もだが各場所をゆつくりとたくさん歩いた。その場所、場所でも過ごせた事は僕の宝物になっている。一週間、本当にありがとうございました。次は妻と終介と一緒に、大好きな日本をうんと紹介したく思っています。

通常下調べは言葉で行う。今回は一切していない。言葉を使わない事が新鮮で、新しい感覚での中国の旅につながった。

言葉にできるほどの語彙力も持ち合わせていないからなのか、言葉に収まりきれないほどの体験をしたのかは分からない。

言葉で考えた事は言葉で残せばいい。感じた事は何で残せば良いのだろうか。残らないから、また感じなくなるのだろうか。写真や動画を見返して、想像するしか無いのだろうか。想起するためには、その場でしっかりとそのものを味わっている事が条件である。いい旅だった！



緑の温もり

仙溪

姫榲桧ひめつぎ（檜科）

ダリア（菊科）

ストックあふろ草（油菜科）

陶花器

年の終わりが近づくにつれ、赤い花と白い花の組み合わせが恋しくなる。この花は昨年12月6日撮影。赤いダリアと白いストックがその時の気分にぴったりに合っていた。しかし問題はそれらに合わせるもう一種の花材だ。近年増えて来たヒムロスギがそんな悩みをかき消してくれる。フワフワした葉はデリケートな花にも優しく寄り添ってくれる。温もりを感じる質感が、初冬の冷たさに心地よい。

ヒムロスギはサワラの園芸品種で、なぜかサツマスギの名で出回っていた。包まれて萎縮した枝を丁寧に広げると、本来の張りをとりもどして生き生きしてくる。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
11 月号
No. 737

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



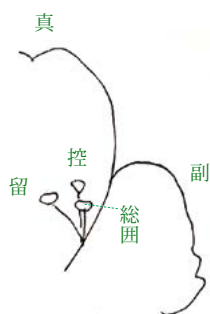


ツルウメモドキ 仙溪
蔓梅擬(錦木科)
菊(菊科)
陶花瓶

ツルウメモドキの実が黄色くなり、殻が弾けると艶やかな赤色から橙色もしくは黄色の実が顔をだす。秋の深まりを感じる。

ツルウメモドキの生花には、蔓を支えるものが要る。そんな時のために捨てずにストックしておいた真つ直ぐな枝を支えにして、なおかつ真と副を絡ませていけている。自然なカーブに心も弾む。

留側には菊が似合う。無理に撓めると折れてしまうので、茎に針金を入れて撓めた。その方が長い間元気でいてくれる。





糸菊と丁子草の生花 ちようじそう

仙溪

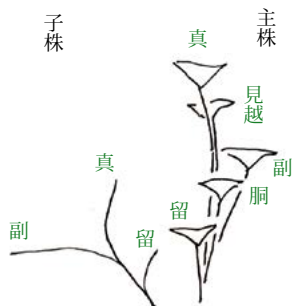
主株 糸菊2種 (菊科)

子株 丁子草 (夾竹桃科)

陶水盤

菊の生花は中輪菊までが良いと教わったが、いけ方によつては、秋の大輪菊も生花で楽しめる。バランスを考慮して控を入れずに見越を加えた。花持ちを優先して、留のほかは撓めずにいけている。

主株は立ち姿に。子株で横への動きを。チヨウジソウの黄葉で季節感が深まった。





鮮やかな葉と花

△4頁の花▽ 櫻子

木苺 (薔薇科)

高砂百合の実 (百合科)

菊「笑の舞」 (菊科)

陶花器 (アメリカ製)

この見事な大輪菊は「笑の舞」という。濃赤色の花色が、色付いたキイチゴの艶やかな葉とよく合っている。タカサゴユリの実で季節感を深めた。花器の一部とキイチゴの葉色が繋がってくれた。



日本の風土に馴染んで

△5頁の花▽ 櫻子

赤紫蘇 (紫蘇科)

千日紅 (苧科)

女郎花 (女郎花科)

木通籠

和製ハーブのシソは中国やヒマラヤの原産だが、縄文時代に



白花の萩とレモンちゃん。
はぎ



はすでに日本に来ていたそう
だ。栄養価が高く、薬効性に富
む。料理の薬味に使う大葉はア
オジソの葉。しば漬は夏野菜と
アカジソの漬物というふう
に、食卓に馴染みが深い。
アカジソの花が花屋に売られ
ていたの、オミナエシ、セン
ニチコウを取り合わせてアケビ
で編んだ買い物籠にいった。



大切な菊

健一郎

伊勢菊（菊科）

嵯峨菊（菊科）

野菊（菊科）

擬宝珠（百合科）

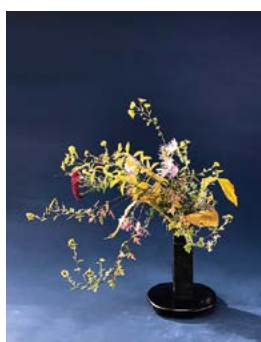
花器（ローゼンタール）

縁あって菊をこよなく愛する方のお宅へ。愛情から現れ出る、お花への、触れ方、その気持ちに刺激を強く受けた。今でも忘れられない日である。

大切な菊の一生についてのお話を聞きながら、共に一本、一本、選んで切っていく。

育てた方の目の前で切るの、その方と、菊の間に割り入る気持ちがいよいよ一層強くなり、申し訳ない気持ちになった。

近くに生えていた擬宝珠の葉が綺麗だったので添えていた。





秋惜しむ

健一郎

草牡丹（金鳳花科）
秋桜（菊科）

ガラス花器（スウェーデン）

結婚を機に、現在スウェーデンで住まうお弟子さんからのお土産で頂いた。日常的だが、洗練されていて良いものである。ヴァイキングの時代からスウェーデンでは、「ちようどいい」という意味でラーゴンという概念があるらしい。日本語にはないニュアンスで、自分のこだわりを大切に、無理なく生活するという意味らしい。

北欧の寒く暗い季節の長さと、それを取り巻く環境がもたらしたものでろうか。

スウェーデンで生活をしていれば、春は待ち遠しく、秋がより名残惜しいものになるであろう。

ちようどいいでは我慢ならず、欲張りな僕はとびきり秋の出逢いを楽しんだ。



同

花伝書を見る

立花 すすきのきしん
薄除真

「除真行の花形の内左流枝」
むだりながし

林昌

薄菊 うめもどき
松 梅擬

熊笹 かたぎ
柘植 堅木

小菊 なつはげ
夏櫨 蒼我

(立花時勢粧・上)



ススキを大きく真にし
て、山の木々で下方の景
色を作っている。

山頂で風に波打つスス
キの群生をイメージして
立てたものか。

「山頭有草体」という立
て方がある。実際に山で
見た景色を元に立ててい
るのだと思う。

林昌

桑原専慶流師範会
立花研修会

会期 10月20日(日)
会場 六角会館(京都)
講師 桑原仙溪
参加 24名

【立花の役枝について】

真(心)は一番高く立つ。除真は梢を正真の上に戻すのが常で、戻さない時もある。

正真(正心)は直真立では真の前に立て、心隠とも呼ぶ。除真立では中心に直立する。

副は高く真に添い上り、真に勢いを持たせる役目。

請は真の勢いを受け持つ役目。副とは対照的につくる。

見越は遠くの高木を眺める心で。前置との釣り合い、正真との映りを考えて作る。除真の見越は左右高下を自由に作ってよい。

流枝は水際低く横へ(長く)流れるように。瓶の後ろ隅より出し、前置より前へ出ない。

前置は花形の要、草木の根締め。水際の正面に長く出すのが真の前置。行、草の前

置もある。

胴は瓶上の景所。縦横左右前後の大枝を育てる所。

控枝は副の下。他との釣り合い。無しも可。

腰は流枝、控枝の後ろ。真との釣り合い。

水際は夏高く、冬低く。

かこいで見苦しい所を囲い、景色も作る。

谷洞谷は胴の後ろ、正真の前。洞は流枝と前置の間。

つやは外より添え、内より頼らせて立てて、強々しいものを柔らかに見せる。

あしらいは役枝に足りない要素を補う役目。

晩秋の立花

△表紙の花△ 仙溪

ヒペリカム(弟切草科)

野茨(薔薇科) 鶏頭(莧科)

老鴉柿・老爺柿(柿の木科)

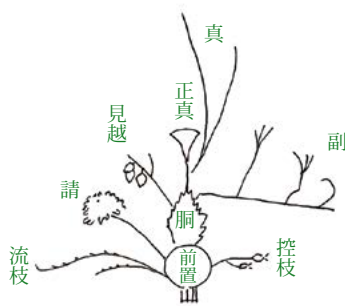
菊「かがり弁」(菊科)

赤芽柳(柳科) 小菊(菊科)

梔子(茜科) 姫桧杉(檜科)

陶コンポート

上半分の赤色濃淡、下段の黄色、中段の白色が、互いに引き立てあっている。ロウヤガキとクチナシの実、かがり弁の菊と秋色のケイトウ。いい花材に恵まれた。(昨年11月27日撮影)



枇杷、木蓼、竜胆、小真弓、梅、小菊。

中国の挿花^{そうか} ⑫

仙溪

6種の花器それぞれに、晩秋の花卉が素朴に挿されている。どの挿花も花卉の種類は1種あるいは2種で挿し方も自然体だ。

右上はハゲイトウ、オモト。ハゲイトウは熱帯アジア原産だが、中国には宋時代に伝来。雁来紅^{がんらいこう}とも呼ばれる。

オモトは日本と中国原産。

左上は中央に赤みのさす白色中輪キク。

右中はチャノキの花だろうか。チャノキは中国西南部原産。開花は秋。

真ん中はスルガランだろう。中国南部原産で夏から秋に咲き、とても良い香りがする。

右下は2種の小輪キク。

左下は2種のアスターか。アスターは中国北部原産。

花器の素材、形、焼き方、絵付けも様々。花台も4種それぞれ違う。さりげなく如意が置かれて吉祥画の体裁をとっているが、主役は花たちだ。

さて、この軸は織物である。中国では緯絲（こくし）と呼ばれる綴織^{つづれおり}だ。宋時代以降、花鳥画や山水画を多彩な

糸で緻密に織り上げたものが宮廷に飾られた。中国南部の蘇州^{そしゅう}が緯絲の中心地だったそうだ。

過去の記録的な意味を込めて乾隆帝がつくらせた挿花の軸のように感じる。縁起の良い花や器物の絵が主流の時代に、素朴に花を器に挿す行為の清らかさを伝え残したかったのでは、などと想像をふくらませている。



おぶせ
小布施

高井鴻山と北斎

仙溪

10月初旬、栗の季節に「朱雀^{すざく}」

という名の新栗の菓子を食べたくて、北信濃の小布施を訪れた。栗を食べたら北斎館へ。小布施は葛飾北斎（1760～1849）

が晩年（83～89歳）に長期滞在して、寺院や祭屋台の天井絵を制作するなど多くの肉筆画を描いた所。それには北斎を江戸から小布施へ招いた人物がいた。

小布施の豪農・高井家当主、高井鴻山（1806～1883）は15歳から16年にわたり京都や江戸へ遊学し、各界の第一人者か

ら学問や芸術を修めた。家業を継いでからは日本の行く末を憂い、幕末の変革に関わり、維新後は東京や長野に私塾を開いて教育活動に専念した。

その高井鴻山が小布施を文化の香り高い地にするべく、絵の師匠と敬服していた北斎を4度も小布施へ招いている。

高井家は過去の飢饉の際には代々築いてきた巨万の財を惜しみなく困窮者の救済に当てている。そんな家風が鴻山を社会に深く関わらせたのだろう。

北斎も鴻山の情熱に応えようとした。二人の熱い交流が今の小布施に息づいているように感じた。



『鶏頭』北斎 北斎館蔵

企画展「北斎の植物図鑑」より。
北斎は様々な植物を小布施で描いている。



天井絵を見上げた時に見える並び方。

『上町祭屋台天井絵 怒濤図』北斎

上：男浪 下：女浪 北斎館管理

神輿屋台の天井絵。周囲の縁絵は北斎の下絵を基に鴻山が彩色した。怒濤図の下には「水滸伝」に登場する勇ましい皇孫勝（公孫勝）が龍を呼び出す像がある。この像も北斎プロデュース。



左『菊図』北斎（八十八歳） 右『菊図』高井鴻山 北斎館蔵

北斎と高井鴻山、それぞれの菊花の軸が並んで展示されていた。鴻山は書も絵も才があり、それらは小布施の高井鴻山記念館で見られる。



ピラミッドアジサイ

仙溪

ピラミッド紫陽花（紫陽花科）
薔薇（薔薇科）

陶コンポート

ピラミッドのような花序^{かじよ}なのでピラミッドアジサイと呼んでいる。また、アジサイよりも遅れて7月頃、旧暦の6月（水無月）に咲くのでミナヅキとも呼ばれる。

この花はノリウツギ（糊空木）の園芸品種で、もとのノリウツギは樹皮から糊^{のり}を採り和紙の製造に利用されてきたが、切り花や庭園の植栽ではあまり見かけない。大台ヶ原にノリウツギの自生地があるそうだが、秋色に染まった花を見てみたいものである。

大きなピラミッドアジサイは高価だが存在感は強い。葉の美しいバラを選んで、すっきりと2種でいけた。

